■作品タイトル
「浅草ロ・ロ・ロック」
■作・うちやまきよつぐ

■　1.
　　昭和20年８月。早朝。
　　呉海軍工廠、潜水艦ドック。
　　静かな波音が聞こえる。
　　伊507を前に百目鬼巳喜男少将（二種軍装）と真柴正人少佐（三種軍装）。
　　そして、彩里花。
　　真柴、伊507を見上げて、
真柴「…これは!?」
百目鬼「ヒトラーからの贈り物だ」
真柴「ヒトラーからの贈り物!?」
彩里花「……」
百目鬼「伊507。ヒトラーから贈られたUボートを我が海軍の最高技術を持って改造した。我々の最後の希望だ」
真柴「最後の希望…まさか、本土決戦ですか!?」
百目鬼「（その質問には答えず、）真柴少佐、わざわざ来てもらったのは他でもない」
真柴「ハッ!!」
　　ト、姿勢を正す。
百目鬼「最重要機密任務だ」
真柴「最重要機密任務？」
百目鬼「今後、我々の正体もその任務も我々以外の誰にも知られてはならない」
真柴「ハッ」
　　ト、彩里花を気にする。
真柴「？」
百目鬼「（気が付いて、）気にしなくていい。私のボディガードだ」
真柴「ハッ」
彩里花「……」
百目鬼「その前に、君ほどの腕前の艦長が何で船を降ろされた？」
真柴「（少し云い辛そうに）特攻に反対しまして…」

百目鬼「（頷く）……」
真柴「特攻は作戦とは申せません。優秀な搭乗員を育てるのに必要とする手間。その対効果を考えますに、特攻は貴重な戦力の浪費でしかありません」
百目鬼「（真柴の真意を理解して、）若者が無駄死にするのは、実に耐えがたい。本音はそうだな？」
真柴「（頷く）……」
百目鬼「すでに日本の将来を見据えていると云うワケか…さすがだな」
真柴「……」
百目鬼「君に打って付けの任務だ」
真柴「……」
百目鬼「この艦を無事に横須賀まで送り届けて欲しい」
真柴「横須賀？」
百目鬼「作戦の全貌は艦長室のテーブルの上に書類としてしたためてある。無論、読後焼却せよ、だ」
真柴「ハッ!!」
百目鬼「真柴少佐、只今をもって潜水艦伊507の艦長を命じる。出撃は明朝0600」
真柴「ハッ!!」
ト、敬礼。
百目鬼「頼むぞ真柴少佐。日本の将来は君の双肩に掛かっている」
真柴「ハッ!!」
ト、姿勢を正す。
百目鬼「……」
真柴「……」
彩里花「……」
静かな波音。
三人の中にゆっくりと暗転。

■　2.
監督、現れて、
監督「ロック探偵事務所シリーズ第17作、“私を月に連れて行って”シーン69、カット5656。ヨーイ。スタートッ!!」

ト、絶叫ッ!!
音楽、カットイン。
“SECRET AGENT MAN”
昭和44年10月。
大東映画撮影所。
“ロック探偵事務所シリーズ”の撮影中。
明智小六郎と朝丘里香子現れて、
小六郎「名探偵、明智小六郎だッ!!」
里香子「その助手、朝丘里香子ッ!!」
そして、黒百足の海底秘密基地。
青い海胆、現れて、
青い海胆「（小六郎に、）どうしてココが？」
小六郎「（青い海胆に、）アンタの後を付けて来たのさ、青い海胆」
里香子「どじったわね、青い海胆」
青い海胆「ウニウニ、ウニウニ…」
小六郎「さあ、黒百足のところへ案内して貰おうか」
青い海胆「そおうまくは行かないわ。（桃色珊瑚に、）殺っておしまい、桃色珊瑚ッ!!」
桃色珊瑚、現れて、
桃色珊瑚「ハイ、青い海胆様」
里香子、桃色珊瑚を認めて、
里香子「（小六郎に、）先生、弱そう」
小六郎「イヤ、こういう奴が意外に、」
構わず、向かっていく、桃色珊瑚。
桃色珊瑚「ウオオオオオッ!!」
里香子、一瞬にして、桃色珊瑚を舞台袖に投げ飛ばす。
里香子「ウリャアアアアアッ!!」
小六郎「（それを確認して、）弱ッ!?」
黒百足、現れて、
黒百足「騒々しい。どうしたの青い海胆？」
小六郎「現れたな、黒百足」
黒百足「（小六郎に、気が付いて、）明智小六郎…どうしてココが!?」
青い海胆「申し訳ございません」
黒百足「（驚いて、）青い海胆、オマエ…」
青い海胆「どのような罰でも、黒百足様」

黒百足「（青い海胆に、）それでは、覚えにくいセリフをお云いッ!!」
青い海胆「そ、それは…」
黒百足「早くッ!!」
青い海胆「ハイ。（ト、覚えにくそうなセリフを云う）」
黒百足「（青い海胆に、）良く、覚えましたね」
青い海胆「（黒百足に、）ありがとうございます」
黒百足「（豹変して、青い海胆に、）青い海胆、ミサイル発射ッ!!」
青い海胆「ハイッ!!」
　　ト、足早に退場。
小六郎「（里香子に、）里香子くん、追うンだッ!!」
里香子「ハイッ!!　待て、青い海胆ッ!!」
　　ト、青い海胆の後を追う。
黒百足「（小六郎に、）明智さん」
小六郎「？」
黒百足「こんな安穏とした都会に何の魅力があるの？」
小六郎「？」
黒百足「都会はね、恐怖に包まれてないと、恐怖している人間こそが一番美しいのよ」
小六郎「……」
黒百足「私が見せ掛けの宝石を本物の宝石に変えてあげるわ」
小六郎「世界は混沌としているからこそ面白い。世界には本物の宝石も偽物の宝石も必要なンだよ」
黒百足「明智さんらしくもない。アナタが求めているのは本物の犯罪。混沌とした世界に燦然と輝く宝石の様な犯罪。そうでしょ？」
小六郎「ボクにもう少し勇気があったなら…」
黒百足「ええ。私とアナタは素敵なパートナーになれたでしょうね」
小六郎「残念だが、その通りだ」
　　ト、二人、お互いに銃を向けて、対峙

する。
一触即発の間合いが続く。
船の汽笛が大きくなる。
ボーッ!!
続く、二発の銃声。
間。
黒百足、スローモーションの様にゆっくりと倒れる。
小六郎、黒百足に駆け寄り、抱き起こす。
小六郎「…百足」
黒百足「（笑顔で、）うれしいわ、アナタが生きていて」
黒百足、絶命。
小六郎「……」
里香子、戻って来て、
里香子「先生!!　ミサイルが!!」
小六郎「（里香子に、）ロケットパック」
里香子「ハイ」
ト、腕時計型の無線機に向かって、
里香子「ロケットパック、集合ッ!!」
ロケットパック「ハイッ!!」
ト、二台のロケットパックが現れる。
里香子「装着ッ!!」
ロケットパック「ハイッ!!」
ト、小六郎と里香子に装着する。
里香子「発進ッ!!」
ロケットパック「ハイッ!!」
ト、ロケットパックを装着した小六郎と里香子、大空へ飛翔して行く。
場面転換。

大空を行く、ミサイル。
ロケットパックを背にした小六郎と里香子が現れる。
里香子「（ミサイルを示して、）先生、あれッ!!」
小六郎「太平洋に叩き落とすンだッ!!」
里香子「ハイッ!!」
二人、ミサイルの両脇に位置して、そ

の進路を下方修正する。
やがて、ミサイルの角度が変化する。
二人、ミサイルを支えたまま、海面を目指す。
グングン海面に迫る、二人に支えられたミサイル。
海面ギリギリでミサイルから離れ大空へ飛翔する、小六郎と里香子。
ミサイル、海面に突っ込んで行く。
一瞬後、大爆発ッ!!
ドカーンッ!!
監督、現れて、

監督「カットッ!!　オッケイッ!!」

続く、助監督の声、

助監督「シーン69。カット5656。オッケイでーす。休憩入りまーすッ!!」

助監督、イス（ディレクターズチェア?)を持って来て、小六郎と里香子に勧める。

助監督「こちら、どうぞ。此の後は、シーン56、カット6969からです。準備出来ましたら、すぐに呼びに来ますから、少々、お待ちください」

ト、素早く去る。
小六郎（長谷川官九郎）、里香子（加賀ルリ子）、助監督に礼を云って、
座る。
ベテラン音響の渡辺さん現れて、

渡辺さん「（官九郎とルリ子に、）お疲れ様でした」

官九郎とルリ子「あ、渡辺さん、お疲れ様でした」

渡辺さん「実はお別れのご挨拶に…」

官九郎とルリ子「お別れ？」

渡辺さん「実はこのシャシンを最後にテレビに行くコトになりまして…」

ルリ子「テレビ？」

渡辺さん「私は、シャシンに残りたいって言い張ったンですがね。上がどうしてもって…」

ルリ子「それでわざわざ」
渡辺さん「お二人にはお世話になりっぱなしで、」
ルリ子「いえ、こちらこそ、」
渡辺さん「シリーズ、最後までお付き合いしたかったンですけどね」
ルリ子「最初からでしたもンね」
渡辺さん「ハイ」
ルリ子「もうあの汽笛も聞けないンですね」
　　汽笛。ボーッ!!
官九郎「……」
ルリ子「……」
　　渡辺さん、二人の手を取って、
渡辺さん「長い間、ありがとうございました」
　　官九郎とルリ子「こちらこそ」「お元気で」等々。
　　やがて、渡辺さん、去る。
官九郎「……」
里香子「（官九郎に、）みんなテレビに行っちゃうのね」
官九郎「そうだな」
ルリ子「淋しいわね」
官九郎「ああ」
ルリ子「テレビの時代なンだね」
官九郎「……」
ルリ子「（少し心配になって、）…映画、」
官九郎「（遮って、）なくならないよ。映画は絶対、なくならない」
ルリ子「官九郎さん…」
官九郎「そうだ。このシャシン、クランクアップしたらスタッフ、キャスト全員で温泉にでも行こう」
ルリ子「ホント!?」
官九郎「もちろん、オレのおごりだ。松方（松方弘樹さんのコト）なんかに負けてたまるかッ!!」
ルリ子「（煽って、）そうだ、そうだッ!!」
　　ト、助監督、現れて、
助監督「（官九郎とルリ子に、）撮影再開します」

官九郎「おう」
ルリ子「ハイ」
　　ト、立ち位置に付いて、ポーズ。
監督の声「シーン56、カット6969。ヨーイ。
　スタートッ!!」
　　官九郎とルリ子、役に戻って、
小六郎と里香子「ロックにお任せッ!!」
　　音楽、カットイン。
　　“SECRET AGENT MAN”
　　シークレットダンサーズ（60 年代風の
　　レトロな衣装。ツィッギー風?）現れて、
　　小六郎と里香子を中心に踊る。
　　60年代風のレトロなダンス。
　　ダンス決まって、
　　場面転換。

■　3
　　現在。
　　劇団“誰もいない国”、稽古場。
　　平仁が一人で稽古している。
　　仁、土下座して、
仁「申し訳ありませんでした」
　　仁、ちょっと考えて、
仁「違うなあ…」
　　ト、場所を変えて、
仁「（土下座して、）申し訳ありませんでし
　た」
　　また、ちょっと考えて、
仁「何か違うなあ…」
　　ト、また、場所を変えて、
仁「（土下座して、）申し訳ありませんでし
　た。通し稽古にはちゃんと参加しますから、
　どうか、役から外すのだけはお許し下さい」
　　仁、ちょっと考えて、
仁「これかな」
　　ト、もう一度、同じ演技を繰り返す。
　　相楽永、戻って来て、
永「ただいま〜。ハイ、お土産」
　　ト、中華まんの入った袋を仁に見せる。
仁「（それを見て、）肉まんすか？」

永「アンタはね。私は、炭火焼チャーシューまん」

ト、自分の分の炭火焼チャーシューまんを袋から取り出すと、肉まんの入った袋を仁に手渡す。

仁、受け取って、

仁「いただきます。（ト、食べながら、）で、どうでした？」

永「今からじゃ無理だって」

仁「あ、やっぱり」

永「アンタの最後の公演だから、盛り上げてやろうと思ったンだけどね」

仁「鈴木砂羽さんが演出してくれりゃあ、話題になりますもんね」

永「なるなる。お客さん、ドバトバだよ」

仁「ですよね～」

永「残念だったね～」

仁「一所懸命、土下座の練習したのになあ…」

永「仁ちゃんだったら無駄にはならないよ。すぐに役に立つって、」

仁「あらららら～」

永「（少し改まって、）仁ちゃん、ウチ入って何年だっけ？」

仁「５年ですけど」

永「５年かあ…」

仁「？」

永「（いろいろ思い出して、）楽しかったね」

仁「（察して、）ごめんなさい。オヤジがケガしちゃったもンで、」

永「分かってる。何度も聞いた。でもさあ、普通、牛の下敷きになる。牛が気絶するほど乳搾る？」

仁「一途な父でして、」

永「あ～あ。到頭、私一人かあ～」

仁「オヤジの具合が良くなったらすぐ戻って来ますから」

永「無理しなくて良いよ。牧場、継げば良いじゃん」

仁「（真顔で、）そんなコト云わないで下さい。絶対戻って来ますからッ!!」

永「……」
仁「オレ、分かったンです」
永「何？」
仁「最初は、オレ、専門学校卒業したらすぐにデビューして人気者になってお金ドバドバ稼げるって思ってたンです」
永「バカじゃない。現実をちゃんと見なさいよ」
仁「ホントバカでした。現実もちゃんと見ました」
永「で？」
仁「で、永さんに出会って、あ、そンなんじゃないンだ。ただ好きだから演ってる人も居るンだって初めて分かったンです」
永「（気が付くのが、）遅〜いッ!!」
仁「ハイ。確かに時間掛かっちゃったかもしれないけど、オレ、お金とか、有名になるとか、女の子にもてるとか、そう云うのじゃなくて、ただ芝居するコトが好きだって、やっと分かったンです」
永「さらに、遅〜いッ!!」
仁「（真顔で、）間違いを改めるのに早いも遅いもありませんよね」
永「はあ？」
仁「だから、絶対戻って来ますから、待っててください」
永「…分かったよ。待ってるよ。ただ、私が生きてるウチに帰って来てね」
仁「ありがとうございますッ!!」
　　ト、土下座。
永「（それを見て、）ホラ、土下座」
仁「（気が付いて）あ」
　　二人、ちょっと笑う。
永「ンじゃ、稽古しようか」
仁「ハイ。あ、ロックキネマ劇場、借りてくれたンですよね」
永「アンタの最後の公演だと思ってさ。奮発しちゃったよ。老舗だよ。名門だよ。変なコト出来ないよお」
仁「頑張りますッ!!」

永「口はイイから、身体動かしな」
仁「ハイ」
永「行くよ。スリーッ!!」
永、仁、タップを踏み始める。10秒くらい？
場面転換。

■　4
浅草、六区。
ロックキネマ劇場。事務室（?）
叶騎宇麻、管亜々人、佐伯（不動産会社社長）。
騎宇麻、佐伯、対峙して座っている。
佐伯「（騎宇麻に、）三億ですよ、三億ッ!!」
亜々人「！」
騎宇麻「三億が五億でも十億でもダメなモンはダメなンだよッ!!」
佐伯「頑固な人だなあ…」
騎宇麻「そりゃあ、こっちのセリフだよ。アンタ、今日で何回目だ？」
佐伯「？」
亜々人「25回目です！」
騎宇麻「25回目だってよ。（亜々人に、）今日何日だ？」
亜々人「25日です」
騎宇麻「25日で25回目って毎日じゃねぇか。冗談じゃないよお」
佐伯「ですから、冗談でなく本気で譲っていただきたいンです」
騎宇麻「こっちだって本気で譲りたくないンだよ。いい加減、帰ってくれよ。（亜々人に、）管ちゃん、塩ッ!!」
亜々人「ハイ」
ト、奥へ引っ込む。
佐伯「（察して、）分かりましたよ。今日は帰ります。（帰り支度しながら、）また、明日、来ます」
騎宇麻「来なくてイイよ」
佐伯「絶対に諦めませんから。どんなコトしても手に入れて見せますから」

騎宇麻「脅してんのかこのヤロー。（亜々人に、）管ちゃん、塩ッ!!」
亜々人「ハーイ」
　　ト、食卓塩をもって現れる。
　　佐伯はもう居ない。
亜々人「あれ？」
騎宇麻「もう帰ったよ」
亜々人「根性ありますね」
騎宇麻「敵ながらあっぱれってヤツか」
亜々人「ハイ。でも、何でなンでしょう？」
騎宇麻「何が？」
亜々人「何で、こんな、き（汚い、）あ、」
騎宇麻「こんな、汚い劇場、欲しがるンでしょうってか？」
亜々人「いえ、こんな老舗の劇場を欲しがるんでしょう？　それも三億円出してもですよ」
騎宇麻「三億はちょっとおしいことしたかな」
亜々人「（たしなめて、）オヤジさん」
騎宇麻「でも、幾ら積まれても譲るワケにはいかねぇんだよ」
亜々人「ワケありってヤツですね」
騎宇麻「築77年。今は芝居小屋だが、昔は映画館でね」
亜々人「映画館？」
騎宇麻「映画のピークは昭和33年で、年間の観客動員数が11億３千万人だった。当時の日本の人口が９千万人だから、すべての国民が１年間に12回、１ヶ月に１回以上、映画館に通ってたってコトになるなあ」
亜々人「今じゃ、考えられませんね」
騎宇麻「小っちゃかったけど、オイラも覚えてるよ。入口のドアが閉まんなくてさ。通路に新聞敷いて、ワイワイガヤガヤ。凄ぇ熱気だったなあ…」
亜々人「へえ」
騎宇麻「オヤジなんか調子に乗っちゃってさ。あ、オイラのオヤジね。騎宇緒ってンだけどさ。外車なんか買っちゃって。キャデラックだったかなあ…。買ったは良いけど、

免許持ってねぇんだよ。笑っちゃうだろ」
亜々人「ハイ。笑っちゃいます」
騎宇麻「そのオヤジがさ、死ぬときにさ、騎宇麻、絶対に劇場を潰すんじゃねえぞ。劇場はみんなの宝物だ。劇場には、みんなの夢と希望が溢れてるンだ。みんなの元気の源なンだ。だから、絶対に潰すンじゃねえぞ。って」
亜々人「そりゃあ、手放せませんね」
騎宇麻、壁に手を付いて、
騎宇麻「思い出、染み込ンじゃってるモンなあ…」
亜々人「ニュー・シネマ・パラダイスみたいですね」
騎宇麻「ありゃあ、イイ映画だったな」
亜々人「オヤジさんの一番好きな映画って何ですか？」
騎宇麻「難しいコト訊くね、お嬢ちゃんは？」
騎宇麻、考えに、考えて、
騎宇麻「ロック探偵事務所シリーズかな」
亜々人「何ですか、それ？」
騎宇麻「そう云うシリーズがあったンだよ。若大将シリーズとかクレージーシリーズとか。昔は、シリーズモンがいっぱいあったンだ」
亜々人「どんな映画なンですか？」
騎宇麻「メチャクチャなンだよ。荒唐無稽の極み。でも、凄えパワフルでさあ。随分、元気もらったなあ…。中でも、シリーズ最終章、“私を月に連れて行って”ってサブタイトルなンだけどさあ。ラスト、東京目掛けて飛んで来るミサイルを主人公の明智小六郎と助手の朝丘里香子が背中にしょったロケットパックで空飛んで、ミサイルを太平洋に叩き落としちゃうンだよ。そんなコトあるかってンだよ」
亜々人「大らかな時代だったンですね」
騎宇麻「昭和44年だからね。大らか、大らか。でも、主人公が宇宙行っちゃおしまいよ」
亜々人「（気が付いて、）あ、ムーン・レイ

カー!!」
騎宇麻「当たり!!　まあ、嫌いじゃないけどね」
　　ト、事務室（?）の黒電話が鳴る。
　　亜々人、出て、
亜々人「ハイ。浅草、ロックキネマ劇場ですけど」
騎宇麻「（気にして、）……」
亜々人「…ワタシ、ワタシ、ってどちら様ですか？」
　　騎宇麻、思い当たって、亜々人から受話器を奪い取り、
騎宇麻「姫音子、姫音子か？　何、カバンを電車に置き忘れた？」
亜々人「（不審に思うが、）…？」
騎宇麻「もしもし、姫音子、姫音子…」
　　場面転換。

■　5.
　　トレーニングジム。
　　叶姫音子、愛葉透子、直木素夫。
　　格闘技のトレーニング。
　　姫音子が実際に闘いながら透子にコーチしている。
　　それを見学している、素夫。
素夫「（熱心）……」
　　やがて、透子がギブアップして、
透子「（姫音子に、）…参りました」
　　ト、床にへたり込む。
姫音子「（素夫に、）次！　素夫くん！」
素夫「（緊張して、）ハイ！」
　　ト、向かって行く。
　　姫音子、素夫と実際に闘いながら、コーチする。
　　座って、見ている、透子。
透子「（熱心）……」
　　やがて、素夫がギブアップ。
素夫「（姫音子に、）…参りました」
　　姫音子、透子と素夫に、
姫音子「今度は二人で！」

透子と素夫「ハイ！」
　　ト、姫音子に向かって行く。
　　姫音子、二人と闘いながら実践的にコーチする。
　　やがて、素夫がギブアップ。そして、透子も。
　　姫音子、二人の様子を察して、
姫音子「（二人に、）休憩しよっか」
透子と素夫「（へたりながら、）ハイ」
　　三人、飲物などを手に休憩に入る。
素夫「（汗を拭きながら、）姫音子さん、強いですねえ」
姫音子「まあね」
素夫「銀行員がそんなに強くなってどうすンですか？」
姫音子「ストレス解消!!　それに、いつ銀行強盗に襲われるか分からないからね。（透子に、）ねえ」
透子「（ハアハア云いながら、）ハイ。テラーですから、一番最初に狙われますから」
素夫「今時、銀行強盗なんか流行りませんよ。西部劇じゃないンだから」
姫音子「例えが、古ッ!!」
素夫「あ、分かった。アクション女優、目指してるンだ!!」
姫音子「あれ？　云ってなかったっけ。私、映画とか好きじゃないの」
素夫「（意外）えッ!?」
透子「姫音子さんの実家、映画館じゃありませんでしたっけ？」
姫音子「昔はね」
素夫「（驚いて、）えッ、先輩の実家、映画館なンですか!?」
姫音子「だから、昔はね」
素夫「今は？」
姫音子「ただの劇場」
素夫「ただの劇場って？」
姫音子「ホラ、お芝居とか演る」
素夫「ああ、小劇場」
姫音子「（頷く、）……」

素夫「何て劇場なンです？」
透子「浅草、ロックキネマ劇場」
素夫「何で先輩が知ってるンです？」
透子「姫音子さんのファンだから」
素夫「ボクだって、ファンです」
姫音子「もう十年も帰ってないけどね」
素夫「えッ？　どうしてです？」
姫音子「いろいろワケありでね」
素夫「ワケあり？」
透子「（素夫に、）一々詮索しない！」
素夫「でも、気になるじゃないですか」
透子「女の過去を気にする男は持てませんよ」
素夫「ホントですか？」
姫音子「まあね」
素夫「（慌てて、）じゃあ、もう、どうでもイイです」
姫音子「どうでもイイですはないンじゃない」
素夫「じゃあ、どうすればイイんですか？」
　　姫音子、透子、笑う。
　　亜々人、飛び込んで来て、大声で、
亜々人「叶姫音子さんていらっしゃいますか？」
姫音子「叶姫音子は私ですけど…？」
亜々人「（姫音子に、）落ち着いて訊いて下さいね」
姫音子「ハイ？」
亜々人「おとうさんが、」
姫音子「えッ!?」
亜々人「騎宇麻さんが、」
姫音子「父がどうかしたンですか？」
亜々人「…危篤なンです」
姫音子「危篤!?」
素夫「（正義感から、）ってか、アンタ、誰なンだ？」
亜々人「（気が付いて、）ああ、失礼しました。私は、管亜々人。ロックキネマ劇場の管理人です」
素夫「管理人？　本物の管理人て証明できンのか？」
透子「素夫くん（云い過ぎじゃない）」

素夫「イヤ、最近は怪しい奴が多いから」
亜々人「（気が付いて、）コレ」
　　ト、腕時計を見せる。
　　姫音子、見て、
姫音子「コレは、とうさんの…」
亜々人「ロックキネマ劇場の創立50周年記念の時計だって云ってました」
素夫「（姫音子に、）本物ですか？」
姫音子「（頷いて、）うん」
亜々人「（姫音子に、）信じてもらえましたか？」
姫音子「ええ。で、とうさんは？」
亜々人「今、病院で。どうしても姫音子さんに逢いたいって」
姫音子「私に、（ト、戸惑っている）」
　　亜々人、姫音子の手を取り、
亜々人「早く来てッ!!　もう間に合わないかも知れないッ!!」
　　ト、半ば強引に姫音子を連れ出す。
　　続く、透子、素夫。
　　場面転換。

■　6.
　　イメージ。在り日しの叶騎宇麻。
　　大好きだった、「浅草キッド」を照れくさそうに唄っている。
　“浅草キッド”（作詞／ビートたけし）
　　騎宇麻、ワンコーラス目を唄い終わると、客席に背を向け、暗闇に消えて行く。
　　間奏の間に、姫音子、透子、素夫、亜々人、永、仁、小六郎、里香子が現れ、続くツーコーラス目を唄う。
　　姫音子のモノローグ。
姫音子「十年ぶりに会った父はもう何も云わなかった」
　　火葬場。
　　煙突からはき出される煙を見詰めている一同。
一同「……」

姫音子「やがて、64年の人生は、煙になって大空へ昇っていった…。何だかうまく行かなくなっちゃった父との関係だったけれど、修復する間もなく、父は逝ってしまった。だから、最後くらい、ありがとう、さよならって、ちゃんと、云ってやりたかった。だから、ありがとう、さよなら、とうさん…」

一同の中にゆっくりと暗転。

■　7.

ロックキネマ劇場。事務室（?）

姫音子、亜々人、永、仁、寺島（ゴールデンファイナンス社員）。

姫音子と寺島は向かい合って座っている。

少し離れた所に亜々人、永、仁が居る。

姫音子「一千万!?」

寺島「ハイ。（ト、懐から証文を出して、）これが、その証文です」

姫音子「（確認して、）確かに」

寺島「こんな時に申し訳ないンですが、こちらも仕事でして、」

姫音子「……」

寺島「期限は一週間。まあ、一週間で返していただけると云うコトだったので、こちらも無利子で見ず知らずの叶さんにお貸ししたワケで、」

姫音子「ハイ」

寺島「今日は、お返しいただけると云う確約さえいただければ、それで、」

姫音子「もちろんお返しします。でも、一週間で一千万は、」

寺島「（遮って、）それは、そちらのご事情でしょ」

姫音子「（力なく、）ハイ…」

寺島「今日はコレで帰ります」

ト、帰り支度しながら、

寺島「あ、万が一、一週間以内に返済の目処が付きましたら、ご連絡下さい」

姫音子「（無理だと分かっているが、）ハイ」
寺島「（周りを見回して、）ココだったら、
　三億ぐらいで売れるンじゃないですか？」
姫音子「えッ？」
寺島「あ、参考までにと思いまして、」
姫音子「……」
寺島「ゴールデンファイナンスの寺島でした。
　失礼します」
　　ト、帰って行く。
姫音子「何で一千万なんて、」
亜々人「（厳しく、）お嬢さんのためです！」
姫音子「私の？」
亜々人「お嬢さんから電話があったンです！」
姫音子「私から!?」
亜々人「今考えたら、詐欺だったンです！」
姫音子「詐欺？」
亜々人「ワタシ、ワタシ、詐欺？」
姫音子「ワタシ、ワタシ、詐欺？」
亜々人「オヤジさん、舞い上がっちゃって、
　娘から十年ぶりに連絡があったって、飛び
　上がって喜んじゃって、」
姫音子「（ちょっと、申し訳ない、）……」
亜々人「私だって、本物のお嬢さんからの電
　話だと思っちゃいましたよ。だって、オヤ
　ジさんが絶対そうだって云うから！　それ
　が電車にカバン忘れたから一千万貸してく
　れでしょ。おかしいと思ったンです。でも、
　オヤジさん、舞い上がっちゃって…」
姫音子「それで、ゴールデンファイナンス
　へ？」
亜々人「いえ、佐伯不動産て会社へ」
姫音子「佐伯不動産？」
亜々人「ココ売ってくれって、しつこいンで
　すよ」
姫音子「何でそんなところへ？」
亜々人「ココを売るって云えば、一千万くら
　いすぐに用立ててくれると思ったンでしょ」
姫音子「じゃあ、ゴールデンファイナンス
　は？」
亜々人「その佐伯不動産の社長が紹介したの

がゴールデンファイナンスなンです」
姫音子「？」
亜々人「ゴールデンファイナンスはすぐに用立ててくれましたよ。佐伯さんの紹介だからって、」
姫音子「でも、そのお金を引ったくられて、それを苦にして自殺…」
亜々人「（泣きながら、）担当の刑事さんはそう云ってました。でも、そんなバカなコトってあります」
姫音子「引ったくりの犯人は？」
亜々人「まだ捕まってません」
姫音子「（ちょっと、考えて）…バカだなあ」
亜々人「バカ？」
姫音子「だって、そうじゃない。詐欺にあって、借金作って、そのお金引ったくられて、挙げ句の果てに自殺だよ。バカでしょ！」
亜々人「いくら実の娘でも云い過ぎです！」
姫音子「（怒って、）アナタに何が分かるの？」
亜々人「分かります！　お嬢さんが出てってから十年。オヤジさんの傍に居たのは私なンですから！」
姫音子「（まだ、怒ってる）大体アナタ何なの？」
亜々人「だから、コノ劇場の管理人です！」
姫音子「だから、とうさんとはどう云う関係なの？」
亜々人「（ポツリと、）オヤジさんは私を拾ってくれたンです」
姫音子「はあ？」
亜々人「（急激にまくし立てる）アタシ、いろいろあって、田舎にいられなくなって、東京出て来て、でも、東京なんて初めてだから、あちこちウロウロして、行くとこなくなって、お金もなくなって、気が付いたら、この劇場の前に居たンです。で、雨が降ってきて、寒くて、心細くなってきて、涙が出て、でも、そう云う時でもお腹は空くンです。そしたら、お嬢ちゃん、ごはん

食べに行こうかって、オヤジさんが声掛けてくれて、ちょっと、イヤ、大分怖かったけど、背に腹はかえられないって云うでしょ。ノコノコ付いてって、あんな美味しいハンバーグ食べたコトありませんでした。ホント、美味しかった。で、オヤジさんに事情話して、行くとこないンですって云ったら、ウチで働くかって、住み込みでいいぞって、お嬢さんの、姫音子さんの部屋使ってもいいぞ、って云われたンだけど、悪いからって、この事務室に住まわせてもらうコトになって、いろいろ仕事教えてもらって、映画のコトも芝居のコトも教えてもらって、」

ト、突然、全てを思い出して、号泣する。

姫音子「（困った）……」

亜々人「（号泣している）」

姫音子「（それより、）ああ、一千万かあ…」

亜々人「（ええ、私の想いは無視）!? 」

姫音子「（決断して、）売っちゃおうか！」

亜々人「（素に返って、）えッ!?」

永、仁「（吃驚、）!? 」

姫音子「その佐伯さんンて不動産屋さん、三億で買ってくれるって云ってるンでしょ」

亜々人「それは、まあ、（そうですけど…）」

姫音子「だったら売っちゃおうヨ。話半分にしても、一億五千万。一億五千万あれば、借金も返せるし、亜々人さんにも退職金払えるし、」

永「（姫音子に、慌てて、）ちょ、ちょっと待って下さい！」

姫音子「ハイ？」

永「私たちはどうなるンでしょう？」

姫音子「私たち、ってか、アナタ方は？」

亜々人「あ、劇団、“誰もいない国”の相楽さんと平さんです」

永「相楽永です」

仁「平仁です」

姫音子「で？」

亜々人「お貸ししてるンです」
永「お借りしてるンです」
姫音子「何を？」
亜々人「ですから、劇場を」
姫音子「（良く分からない）えッ？」
亜々人「ですから、すでに公演の予定が入ってるンです」
姫音子「（理解して、）ああ」
永「ですから、売られちゃうと困っちゃうンです」
仁「公演、出来なくなっちゃうンで」
姫音子「いつ何です、公演？」
永「一ヶ月後です」
姫音子「借金返済期限が一週間後。公演が一ヶ月後。…無理ですね」
永「あら～!?」
姫音子「だって、無理でしょ。一週間後に売った劇場でどうやって一ヶ月後に公演演るンです？」
永「だから、何とかなりません？」
姫音子「何とかって？」
永「せめてウチの公演が終わるまで待ってもらえないでしょうか？」
仁「お願いします！」
永「コイツの最後の公演なンです！」
姫音子「最後？」
仁「ちょっと田舎に帰らなくちゃいけなくなっちゃって、」
姫音子「じゃあ、キャンセル料はお支払いしますから、どこか別の劇場で演ったらどうですか？」
亜々人「（あら～）……」
永「ココじゃなきゃダメなンです！」
仁「そうなンです。ココじゃなきゃダメなンです！」
姫音子「どうして？」
永「夢なンです！」
姫音子「夢？」
永「コノ劇場で、ロックキネマ劇場で公演を打つのが私たちの夢だったンです!!　お金

　じゃないンです。夢を叶えたいンです！」
仁「Dreams Come True…」
姫音子「……」
永「あ、コレ」
　　ト、サイフから小銭を出す。
　　（三千円から五千円くらいか?)
永「（仁に、）ホラ、アンタも」
仁「あ、ハイ 、」
　　ト、サイフから小銭を出す。
　　コッチはホントの小銭。
　　（１円、１０円、１００円玉で７００円くらいか?)
姫音子「何です、コレ？」
永「借金の足しに…」
仁「足しに」
姫音子「（演劇人はコレだからト呆れる。ト、同時に何かしらの方法はないかと考えてもみる）……」
亜々人「姫音子さん！　（お願いします）」
姫音子「（少し考えて、やがて閃いて）…！分かりました。少し考えてみます！」
永、仁「（大感謝）ありがとうございます!!」
　　ト、土下座。
亜々人「（姫音子に、ちょっと心配して、）アテはあるンですか？」
姫音子「一応、バンカーですからね」
　　場面転換。

■8.
　　百目鬼コンツェルン会長室。
　　雷鳴。そして、激しい雨。
　　二つの影。
　　百目鬼大河と彩里花。
　　激しく闘っている。
　　やがて、
彩里花「…参りました」
大河「まだまだだな」
彩里花「私の問題と云うよりは 、」
大河「私の問題か？」
彩里花「益々、お強くなられた」

大河「（笑いながら、）ならば、オマエは益々美しくなった」
彩里花「ご冗談を」
大河「冗談など云わぬ。そのコトはオマエが一番良く知っているだろう」
彩里花「ハッ」
大河「（改まって、）やるべきコトは分かっているな」
彩里花「もちろんでございます」
大河「遠慮はいらぬ。思う存分働くが良い」
彩里花「総師のために」
大河「うむ」
　　彩里花。すでにその姿はない。
　　降り続く雨。
　　見詰める、大河。
大河「……」
　　場面転換。
■　9.
　　百目鬼第一銀行浅草支店。休憩室。
　　姫音子、透子。
　　素夫、ロックキネマ劇場のクレジットファイルを手に現れる。
姫音子「どうだった？」
素夫「（云い辛い）それが…」
姫音子「ダメだったの？」
素夫「クレジットファイルを見る限り問題はないと思うンですが、」
透子「それでも難しいって？」
素夫「一応、稟議書は作ってみますが、」
透子「それじゃ間に合わないでしょ。支店長決裁で何とかならないの？　一千万だったら、本部決裁まで必要ないでしょ！」
素夫「ボクもそう云ったンですけど、」
透子「何？」
素夫「融資は難しいけど、買収だったらなんとかなるかもしれないって、」
透子「買収!?　ウチの銀行が姫音子さんの劇場、買い取るって云うの？」
素夫「平たく云うと、」
透子「誰の提案？」

素夫「融資次長です」
透子「融資次長？」
素夫「どう云うコトでしょう？　ウチの銀行が姫音子さんの劇場買い取って何のメリットがあるンでしょう？」
透子「こっちが訊きたいわ」
姫音子「（諦めて）万事休すか…」
透子「諦めちゃダメです！」
姫音子「えッ？」
透子「トレーニングの時、いつも云ってるでしょ。最後の最後まで諦めちゃダメだ。一瞬の隙で逆転出来るコトだってあるンだって」
姫音子「あれは格闘技でしょ」
透子「格闘技も融資も同じです。人生は闘いです!!」
姫音子「透子ちゃん、今日は熱いわね」
透子「（迷ったあげく、）…ウチ、倒産したコトあるンです」
姫音子「倒産!?」
透子「実家、静岡で工場やってたンです。工場たって、従業員十人くらいの小さな工場でしたけど、（指で示して、）こんな小っちゃなネジ作ってました。最初は仕事も順調で、取引会社の要望で新しい機械も入れたンです。でも、入れた途端に景気悪くなっちゃって。…すぐに貸し剥がしですよ。景気の良い時は借りてくれ借りてくれって毎日のように来てた銀行が、あっという間に手のひら返して、おとうさん、あっちこっち駆けずり回ったンだけど、到頭、期日に間に合わなくて、」
姫音子「だったら、銀行、恨ンでるンじゃないの？」
透子「恨ンでません」
姫音子「えッ？」
透子「おとうさん、諦めなかったンです。オレの作るネジは日本一だ。イヤ、世界一だ。って。またあちこちの銀行駆けずり回って。で、到頭、融資してくれるところ、見付け

たンです。（姫音子に、）何で融資してくれたと思います？」
姫音子「さあ？」
透子「おとうさん、子供の頃、宇宙飛行士になりたかったんですね」
姫音子、素夫「？」
透子「でも、そんなの無理に決まってるじゃないですか。で、考えて、考えて、閃いたんです。そうか!!　オレの作ったネジが宇宙に行きゃあ良いンだって。それから、（おとうさんの頑張る姿を思い出して、でも、涙をこらえて、）死ぬほど頑張って、ホントに死ぬほど頑張って、遂に採用されたんです！　（宙を指差して、）地上 400 キロメートル上空に浮かぶ国際宇宙ステーション。 International Space Station. 略称 ISS 。その日本実験棟“きぼう”のネジはおとうさんが作ったネジなンです!!」
　　姫音子と素夫、思わず、拍手してしまう。
透子「（姫音子に）そんなワケでおとうさんの夢を叶えてくれた銀行に感謝こそすれ恨むなんてとんでもない」
姫音子「で、透子ちゃんも誰かの夢を叶えるために銀行員になった。と」
透子「今はまだテラーですけど、そのうち融資部に移ってガンガン融資して、誰かの夢ガンガン叶えてあげようかなって 、」
素夫「（感動して、）凄い夢持ってるンですね」
姫音子「素夫くんは何で銀行員になったの？」
素夫「安定してるからです」
透子「現実的ィ〜」
素夫「いけませんか？」
透子「いけなくはないけど、なんか、淋しいじゃん」
素夫「人生は安定、安心、安全です！」
透子「現場監督か？」
素夫「何とでも云って下さい」
透子「姫音子さんは？」

姫音子「私？　私は、ヒ・ミ・ツ」
透子「ズルい。私にだけ喋らせといて」
姫音子「って、アンタが勝手に喋ったンでしょ」
透子「えー。二人が訊きたいって云うから」
姫音子・素夫「云ってません!!」
透子「もう。で、どうするンです、一千万」
姫音子「（考えて、）一千万かあ…」
　　場面転換。

■　10.
　　ロックキネマ劇場。
　　姫音子、思案中。
　　亜々人、マグカップにコーヒーを持って現れる。一つは姫音子に、もう一つは自分に、
亜々人「で、どうするンです？」
姫音子「売るしかないかなあ…」
　　ト、コーヒーを一口。
亜々人「（ずっと訊いてみたかった）お嬢さんは、この劇場に未練はないンですか？」
姫音子「なくはないけど、実家だからね」
亜々人「だったら、」
姫音子「でも、十年経っちゃったし、今更ねえ…」
亜々人「（遂に、）オヤジさんと何があったンです？」
姫音子「話したくない」
亜々人「（取り付く島もない）……」
里香子「ごめんください」
　　の声と供に、明智小六郎と朝丘里香子が現れる。
　　二人はこれ以降、常に足が地に着いてない（床から２、３ミリ浮いている）感じ。あくまでもイメージで、
亜々人「ハイ。何でしょう？」
里香子「私、こういう者です」
　　ト、亜々人に名刺を渡す。
亜々人「（読む）ロック探偵事務所、朝丘里香子」

里香子「ハイ。で、こっちが 、」
　　ト、小六郎を示す。
小六郎「探偵の明智小六郎です」
亜々人「探偵さん？」
二人「ハイ」
亜々人「（姫音子に、）お嬢さん、探偵さんだって」
姫音子「探偵!?」
里香子「（姫音子に、）珍しいでしょ。普通だったら、探偵なんて滅多に訪ねて来ないですもんねえ」
姫音子「そりゃあ、まあ…」
里香子「おとうさんに頼まれたンです」
亜々人「オヤジさんに!?」
姫音子「何を頼まれたンです？」
里香子「もし、私に何かあったら、その真相をキチンと調べてくれって」
姫音子・亜々人「えッ!?」
里香子「調べましたよ。キチンと。今日はその報告にあがったンです」
姫音子「（亜々人に、）何か、聞いてる？」
亜々人「（アタマを振って、）全然」
小六郎「（イス？　を示して、）ココ、よろしいですか？」
姫音子「（思わず、）あ、ハイ」
　　小六郎、座りながら、
小六郎「心配はいりませんよ」
姫音子「えッ？」
小六郎「料金ならすでにいただいてますから」
姫音子「えっ？」
里香子「これがその領収書の写しです」
　　ト、姫音子に見せる。
姫音子「（見て、）百万ッ!?」
亜々人「（驚いて、）百万ッ!!」
里香子「名探偵なンで 、」
小六郎「そう。名探偵なンでね」
姫音子・亜々人「？」
小六郎「それとおとうさんには随分とお世話になった」
里香子「おかあさんにもね」

姫音子「えッ!?」
亜々人「？」
姫音子「（里香子に、）母のコト、ご存知なんですか？」
小六郎「私たちの命の恩人です」
姫音子「えッ!?」
小六郎「その件はいずれまた。で、どうします、報告」
ト、里香子の持っているファイルを示す。
姫音子「（亜々人を見る）」
亜々人「（頷く）」
姫音子「（も、頷いて、）一応、伺います」
小六郎「一応ですか？」
姫音子「伺います」
小六郎「里香子くん」
里香子「お二人にはちょっとショックかもしれませんが、」
小六郎「気をしっかり持って、」
姫音子・亜々人「（覚悟して、）ハイ」
里香子「（ファイルを見ながら、）騎宇麻さんですが、」
姫音子・亜々人「（次の言葉を待つ）……」
里香子「どうやら、他殺らしいです」
姫音子・亜々人「他殺!?」
亜々人「（ちょっと目まい）」
姫音子「誰かに殺されたってコトですか？」
里香子「ハイ」
亜々人「でも、刑事さんは自殺だって、」
小六郎「その刑事もグルなンでしょうな」
姫音子・亜々人「えッ!?」
亜々人「刑事さんがグルなンですか？」
小六郎「全ての警察官が正義の味方とは限らない」
里香子「ホラ、人気がある役者だからって芝居が巧いワケじゃないじゃないですか」
姫音子「ハイ？」
小六郎「つまり、世の中ステレオタイプの人間ばかりじゃない、と云うコトですよ」
姫音子「（分かったような分かんないような

で、）……？」
亜々人「（小六郎に、）何で、何で、オヤジさん、殺されちゃったンですか？」
小六郎「おそらく犯人は、この劇場が欲しかったンでしょうね」
姫音子「ココが!?」
小六郎「犯人もその動機もまだ分かりませんが、この劇場を欲しがっているコトは確かな様です」
里香子「（姫音子に、）ココを欲しがってる人に心当たりあります？」
亜々人「あ、佐伯不動産！」
里香子「（記憶しながら、）佐伯不動産」
姫音子「（思い出して、）ウチの銀行も買い取りたいって、」
里香子「（記憶しながら、）百目鬼第一銀行浅草支店」
姫音子「どうしてそれを？」
里香子「探偵ですから」
姫音子「（小六郎に、）でも、何でこんな古びた劇場を欲しがるンでしょう？」
小六郎「何かあるンでしょうな。じゃなきゃ殺人なんてリスクは普通犯さない」
亜々人「何かって？」
小六郎「まだ、分かりません。が、何かあります。何か」
亜々人「ああ、何だろう？」
姫音子「（一所懸命考えるが、)?」
小六郎「あ、肝心なコトを云い忘れた」
姫音子「何ですか？」
小六郎「相手は劇場欲しさに殺人まで犯す輩です。今後、アナタ方が狙われないとも限らない。身辺には充分注意なさる様に」
姫音子・亜々人「…ハイ」
里香子「先生、あれ」
小六郎「あ、（姫音子に、）スクリーンを見せてもらえますか？」
姫音子「スクリーン？」
小六郎「ココがまだ映画館だった時のスクリーンです。残ってるでしょ」

亜々人「残ってます。オヤジさんがどんなコトがあってもスクリーンだけは残しとけって」

（移動してから、）

亜々人がスイッチ（?）を入れると真っ白いスクリーンが小六郎と里香子の目の前に降りて来る。

二人、それを見て、

里香子「（小六郎に、）懐かしいですね」

小六郎「ああ、懐かしいね」

亜々人「ウチに来たコトあるンですか？」

小六郎と里香子、顔を見合わせて、

里香子「ありますよ。何度もあります」

小六郎「何度もね」

里香子「やっぱり待っててくれたンですね」

小六郎「ああ、待っててくれたンだな」

姫音子・亜々人「？」

小六郎、里香子、いつまでも白いスクリーンを見詰めている。

小六郎・里香子「……」

場面転換。

■　11.

劇団“誰もいない国”稽古場。

永と仁、タップダンスの猛練習。（10秒くらい?）

無表情の彩里花、拍手しながら現れて、

彩里花「お上手」

永「（気が付いて、）誰!?」

彩里花「彩里花」

仁「彩里花？」

永「彩里花、って、名前だけ云われても、素性を訊いてんの？」

彩里花「素性？　家柄や血筋。または、生まれ育った境遇や経歴のコト」

仁「アンタ、明鏡国語辞典か？」

彩里花「明鏡？　曇りのない澄み切った鏡のコト」

仁「（永に、）イカレテル」

永「（頷く）うん」

彩里花「行かれる？　アタマの働きや行動が正常でなくなるコト」
永・仁「（怖い）……」
　　彩里花、一瞬で、二人の首根っこを押さえて、
彩里花「公演を中止して」
二人「（苦しい）……」
彩里花「（さらに力を込めて、）分かった」
二人「（さらに苦しい）……」
彩里花「（さらに力を込めて、）分かったよね！」
二人「（死にそう）……」
姫音子「待って!!」
　　ト、姫音子と亜々人が現れる。
　　彩里花、振り返って、
彩里花「（確認して、）叶姫音子」
姫音子「えッ!?」
彩里花「（確認して、）管亜々人」
亜々人「何で知ってるの？」
姫音子「アンタ誰？」
　　永と仁を壁に叩き付け、完全に振り返ってから、
　　永と仁は、ゲホゲホ。
彩里花「彩里花」
亜々人「彩里花？」
姫音子「彩里花。って、名前だけ云われても、素性を訊いてんのよ？」
彩里花「素性？　家柄や血筋。または、生まれ育った境遇や経歴のコト」
仁「ループしてる」
永「（気が付いて、）違う質問して！」
姫音子「！　（頷いて、）どうして、永さんと仁くんを？」
彩里花「邪魔者は消せ。命令なの」
姫音子「命令？」
彩里花「命令は絶対なの」
　　ト、再び、永と仁に向かって行く。
　　永、仁、アワアワ逃げながら、
永・仁「助けてぇ～!!」
　　亜々人が彩里花に向かって行く。

姫音子「!?」
　　亜々人、彩里花の前に立ちふさがって、
亜々人「アタイが相手だよ」
永・仁「亜々人さん!!」
彩里花「お前に用はない」
亜々人「アンタになくてもコッチにあるンだよ!!」
　　ト、向かって行くが、一瞬にして叩きのめされる。
仁「（それを見て、）強え〜!?」
　　姫音子、亜々人に駆け寄って、
姫音子「（心配して、）大丈夫？」
亜々人「コイツ、強過ぎです。牛久じゃ負けたコトなかったのに」
姫音子「茨城（いばらぎ）だったの？」
亜々人「いばらきです（ト、きを強調する）」
姫音子「（安心して、）大丈夫そうね」
亜々人「（察して、）半端なく強いですよ」
姫音子「六区出身だから」
　　ト、彩里花を振り返り、
姫音子「よくも！　（やってくれたわね）」
彩里花「邪魔者は消せ。命令なの」
姫音子「消せるモンなら消してみなッ!!」
　　ト、向かって行く。
　　彩里花、姫音子の攻撃を躱して、
彩里花「アンタは消さない。今日消すのは、（永と仁を示して、）アイツとアイツ」
永・仁「（恐怖で、）アワアワアワ」
姫音子「（永と仁に、）大丈夫。クライアントを守るのもバンカーの仕事だからね」
　　ト、向かって行く。
　　姫音子対彩里花の激闘。
　　やがて、彩里花の一撃が姫音子の急所を捉える。
　　激痛にうずくまる姫音子。
姫音子「……」
亜々人「（同時に、）お嬢さん!!」
永・仁「（同時に、）姫音子さん!!」
彩里花「トドメだ」
　　ト、姫音子に向かう。

銃声。ドギューン!!
銃弾が彩里花の眼前を通り過ぎる。
思わず立ち止まる、彩里花。
彩里花、銃声の方角を振り返って、
彩里花「誰？」
里香子「あら、知らないの。失礼しちゃうわね。朝丘里香子。職業、探偵」
彩里花「探偵？」
ト、銃（リボルバー）を手に現れる、
里香子。
小六郎「（も現れて、）同じく、明智小六郎。お嬢さん。もっと昔の映画も観て勉強しないとね」
彩里花「？」
里香子「（小六郎に、）ってコトは、私たちのデータはインプットされてないみたいですね」
小六郎「そのようですね」
里香子「ってコトは、ひょっとしたら、勝てるかも、」
ト、トリガーを引く。
やがて、全弾(5発）、撃ち尽す。
彩里花、スーパーマンの様に整然と佇んでいる。
その場の一同「（呆然）……」
彩里花「（里香子に、）何の冗談？」
里香子「（小六郎に、）やっぱり、ダメでした」
小六郎「そのようですね」
里香子「どうします？」
小六郎「痛い目に合いますか？」
里香子「（覚悟を決めて、）仕方ないですね」
小六郎・里香子「（一瞬後、）そりゃあッ!!」
ト、彩里花に猛然と向かって行く。
小六郎・里香子VS彩里花の激闘。
小六郎・里香子、苦戦。
姫音子「（見兼ねて、亜々人に、）行くよッ!!」
亜々人「ハイッ!!」
ト、激闘に加わる。
永「（も、仁に、）私たちもッ!!」
仁「（勇気を振り絞って、）ハイッ!!」

ト、激闘に加わる。
彩里花VS小六郎・里香子、姫音子・亜々人、永・仁の激闘。
やがて、彩里花、圧倒的な強さで六人を叩きのめす。
叩きのめされた六人が床のあちらこちらに無様に転がっている。
彩里花「（一同に、）残念でした」
仁「（思わず、）化け物か!?」
彩里花「（仁に、冷ややかに、）失礼な」
仁「（黙り込む）……」
里香子「（小六郎に、）どうします？」
小六郎「（思い付かない）むむむむむむ」
その時、遠くに、パトカーのサイレン。
こっちに向かって来る。
彩里花「チッ!?」
ト、ダッシュで逃亡。
一同「（唖然）えッ!?」
仁「（誰にともなく、）まあ、これだけ騒げばねえ…（パトカーも来ますよ!）」
里香子「（一同に、）私たちも」
一同「ハイ!!」
ト、ダッシュで逃亡。
一人取り残された仁。
仁「えッ!?　何で？」
場面転換。

■　12.
百目鬼コンツェルン本社ビル。（六本木辺り）その超高層ビルの最上階の一室。会長室。
モダンでアートなその室内。
会長の百目鬼大河が窓外の雨を見詰めている。
雷鳴。そして、激しい雨音。
大河の背中を見詰めている彩里花。
大河「お前らしくもない」
彩里花「申し訳ありません。思わぬ伏兵が現れまして、」
大河「伏兵？」

彩里花「明智小六郎と朝丘里香子と云う探偵が 、」
大河「探偵？」
彩里花「ハイ」
大河「で、お前の正体を知っていたと云うのか？」
彩里花「でなければ、あのような攻撃は 、」
大河「？」
彩里花「……」
大河「まあ、良い。その件に関しては、別の者に調べさせよう。オマエは引き続き、劇場関係者を抹殺しろ。ただし、あくまでも事故に見せ掛けてな。公な事件になっては困る。くれぐれもコノ百目鬼コンツェルンの名前に傷を付けないようにな」
彩里花「かしこまりました」
大河「下がってよい」
彩里花「…あの、質問してもよろしいでしょうか？」
大河「何だ？」
彩里花「何故、あの劇場をそんなに欲しがるのでしょう？」
大河「（頷いて、）…私も今まで半信半疑だったンだが 、」
彩里花「？」
大河「じいさんの残した宝物が見つかったンだよ」
彩里花「宝物？」
大河「それがあの劇場のどこかに隠してある」
彩里花「？」
大河「SOL(ソル）が見付けてくれた。さすが、SOL だな」
彩里花「で、宝物とは何でしょう？」
大河「それはまだ秘密だ」
彩里花「？」
大河「楽しみは最後まで取っておいた方が良いだろ」
彩里花「ハイ」
大河「オマエに負けず劣らずの物凄い宝物だ」
彩里花「私に？」

大河「だから負けず劣らずだ」
彩里花「負けず劣らず。両者とも同じ程度で、優劣がつけにくいさまのコト」
大河「（笑って）おもしろいコトを云うな」
彩里花「辞書機能が時々働きます」
大河「日本に来てから75年も経つと云うのにな。（感心して、）ヒトラーも凄いモノを作ったもンだ」
彩里花「（ピンと来て、）分かりました。宝物とは、総統と何か関係があるモノ」
大河「だから、それはまだ秘密だ。楽しみにしていろ」
彩里花「ハッ」
大河「……」
降り続く、雨。
場面転換。

■　13.
ロックキネマ劇場。
姫音子、亜々人、小六郎、里香子、永、仁、透子、素夫。
仁「（その理不尽さに怒っている。）何で僕たちが狙われなきゃいけないンですか!?」
里香子「コレは私の 、」
小六郎「（咳払い）」
里香子「コレは私と先生の推理なンだけど 、」
仁「何です？」
里香子「理由はともかく、相手は、コノ劇場の関係者を消したがってる」
仁「消す？」
小六郎「つまり、殺したがってるワケだ」
仁「殺す!?」
里香子「それも事故に見せ掛けて」
仁「あんなの事故に見せ掛けられませんよ。首絞められて壁に叩き付けられて 、」
里香子「（遮って、）後でロープで吊せば自殺に見せ掛けられる」
小六郎「警察もグルだったら、簡単だよ」
里香子「劇団員、貧乏を苦に自殺!!」
小六郎「演劇人って良く自殺するンだろ？」

仁「しませんよ!!　するのは、メソッド演技の連中だけですよ!!」
　　シーン。
亜々人「（気を取り直して、）じゃあオヤジさんも!?」
里香子「多分、そう。コレは私の、（気が付いて、）イヤ、コレは私と先生の推理なんだけど…」
亜々人「何ですか？」
里香子「（姫音子に気を遣って、）大丈夫？」
姫音子「（気丈に、）大丈夫です。私も知りたいです」
里香子「それじゃあ、改めて。コレは、私と先生の推理なンだけど、この劇場を手に入れたい何者かが、姫音子さんの名前を騙って、騎宇麻さんに電話をした。困ってる姫音子さんを救おうと、騎宇麻さんは劇場を担保に佐伯不動産で一千万借りようと出掛けた。が、何故か佐伯不動産は、ゴールデンファイナンスを紹介する。で、ゴールデンファイナンスは佐伯不動産の紹介だからと劇場を担保に騎宇麻さんに一千万円を貸す。その一千万円を何者かが強奪。それを苦にした騎宇麻さんが首を括って自殺」
仁「首を括って!?」
里香子「そう。担当刑事はあっさりとその事実を認めて事件は一件落着」
永「落着じゃないじゃないですか？　姫音子さんを騙って電話して来た人も騎宇麻さんから一千万強奪した人も捕まってないじゃないですか」
里香子「おっしゃる通り。でも、ちょっと待ってね。推理はまだ終わってないの」
永「ハイ」
里香子「その後、ゴールデンファイナンスの…」
亜々人「寺島さんです」
里香子「そう。その寺島さんって人が姫音子さんに借金の返済を迫る」
姫音子「私だったら、簡単に劇場を手放して、

　そのお金で一千万返済すると思ったンだわ」
里香子「その通り」
永「あ、それを私たちが無理矢理借り受けたから」
里香子「犯人たちの計画が狂ったのね」
仁「それで、僕たちが狙われたンですか？」
里香子「だって、アンタたちがいなかったら、姫音子さん、劇場、手放してたでしょ」
仁「そうか!!」
透子「でも、ウチの銀行は？」
素夫「ウチの銀行もコノ劇場、買い取りたいって？」
里香子「つまり、」
　　ト、間をおいて、
里香子「全員、グル!!」
小六郎以外の６人「えええええッ!?」
透子「その佐伯不動産とゴールデンファイナンスはグルだとしても、ウチの銀行は、一部上場企業ですよ!!」
小六郎「一部上場企業が悪いコトしないとは限らない」
透子「（思い当たって、）それはまあそうですけど…」
里香子「要するに敵はそれだけ巨大ってことよ」
６人「敵？」
里香子「だって、敵でしょ。騎宇麻さんを騙して、殺して、永ちゃんと仁くんの命を狙って、コノ劇場乗っ取ろうとしてるンだから、」
小六郎「（ちょっと喜んでいる）久しぶりの大事件だな」
永「で、これからどうするンですか？」
小六郎「裏付けを取る」
永「裏付け？」
小六郎「今までの話はあくまでも私と里香子くんの推理だ」
里香子「要するに当てずっぽう」
小六郎「ただし、かなり確率の高い当てずっぽうだがね」

里香子「何しろ、名探偵ですから」
永「で、その当てずっぽうが全部当たってたら？」
小六郎「今度はコッチから仕掛ける」
永「仕掛ける？」
仁「何を？」
小六郎「攻撃を」
仁「（驚いて、大声で、）攻撃!?」
小六郎「目には目を歯には歯を」
里香子「騎宇麻さんの仇を取るの」
姫音子「（同時に、）とうさんの!?」
亜々人「（同時に、）オヤジさんの!?」
里香子「騎宇麻さん、私たちのコト、ホントに大切にしてくれた」
小六郎「ああ」
里香子「だから、恩返し」
小六郎「ああ」
姫音子「？」
小六郎「(6人に、）あ、コレは、私たちが勝手にやるコトだ。みんなは無理して付き合うコトはない」
里香子「何しろ、命がけですからね」
仁「命がけ？」
小六郎「今後どうするかは各々自分たちで考えてくれ」
里香子「じゃあ、私たちはコレで」
　　ト、二人、行ってしまう。
残された一同「（呆然）……」
　　場面転換。

■　14.
　　ロックキネマ劇場。
　　時間経過。
　　姫音子と亜々人。
亜々人「…お嬢さんはどうするンですか？見ず知らずの人がオヤジさんの仇を取るために一所懸命奔走してるのに」
姫音子「どうしたら良いと思う？」
亜々人「えッ!?」
姫音子「何だか良く分かんなくなっちゃった」

亜々人「……」
姫音子「（ポツリポツリと語り出す）ココがまだ映画館だった頃、もう映画はかなり斜陽だったンだけど、とうさん、映画の灯を消しちゃいけないって、いろんなコト考えて、週末にシリーズモノのオールナイト興行を思い付いて、それが大当たりして、近所の映画館も協力してくれて、一時期大いに盛り上がったコトがあったの」
亜々人「（ただただ聴いている）……」
姫音子「小っちゃな映画館だから、従業員も居なくて、おじいちゃんがもぎり、とうさんが映写係、かあさんがフィルムを運んでたの」
亜々人「フィルムを？」
姫音子「昔は終わったフィルムをフィルム缶に入れて次の映画館まで自転車で運んでたのよ」
亜々人「（思い出して、）あ、ニュー・シネマ・パラダイスでやってた」
姫音子「そう。それ」
姫音子「…その日は大雨だった」
亜々人「その日？」
姫音子「居眠り運転のトラックが 、」
亜々人「！」
姫音子「フィルムを運んでいたかあさんの自転車をはねた」
亜々人「!!」
姫音子「その時私は、映写室でとうさんと一緒に映画を観ながら大笑いしていた。かあさんがはねられた、その時…」
亜々人「……」
姫音子「私たちが病院に着いた時には、かあさん、もう、息をしていなかった」
亜々人「！」
姫音子「私は、フィルムが、映画が、映画館が、かあさんを殺したと思った。だから、映画館をやってるとうさんも何れはフィルムに、映画に、映画館に殺されると思った。…今思えば妄想だけど、その時はホントに

そう思ってた。だから、とうさんに映画館はやめてくれと頼んだ。でも、とうさんはやめなかった」
亜々人「……」
姫音子「私は逃げたの。とうさんの死の恐怖から逃げたの」
亜々人「それで、家出を？」
姫音子「家を出たって意味なら、確かに家出ね。…あれから十年。私は銀行に勤めて、現実世界の中で生きるコトで虚構の世界を遠ざけた」
亜々人「どうしてです？」
姫音子「安全だと思ったのよ。でも、一瞬にして引き戻された」
亜々人「オヤジさん云ってましたよ。姫音子は帰って来る。必ず帰って来る。って」
姫音子「…ホントは手放したくないンだよ」
亜々人「えッ!?」
姫音子「私が育った実家だし、でも、とうさんやかあさんの思い出がいっぱい詰まってて、思い出に押しつぶされそうになるンだ」
亜々人「……」
姫音子「私なりに前に進みたかったンだよ。前進したかったンだよ」
亜々人「だったら決着付けないと！」
姫音子「決着って、銀行員の私にどうしろって云うの!?」
　　小六郎と里香子、現れて、
小六郎「現金を奪還する!!」
姫音子「ハイ？」
里香子「私と先生の当てずっぽうはほぼ正解。調査の結果、すべての企業が百目鬼コンツェルンと繋がっていた」
姫音子「百目鬼コンツェルン!?　百目鬼コンツェルンって、あの百目鬼コンツェルンですか!?」
里香子「そう。あの百目鬼コンツェルン」
亜々人「（姫音子に、）そんなに凄いンですか？」
姫音子「世界でも五本の指に入る大企業。ウ

チの銀行だって、百目鬼グループだからね」
亜々人「へえ。（小六郎に、）じゃあ、その百目鬼コンツェルンから現金を奪還するンですか？」
小六郎「イヤ。全ての企業が百目鬼コンツェルンと繋がっていたと云うコトが分かっただけで、まだ百目鬼コンツェルンの誰が主犯かは皆目見当が付かない」
亜々人「じゃあ、どこから奪還するンです？」
小六郎「ゴールデンファイナンス」
亜々人「ゴールデンファイナンス!?」
里香子「そう。ゴールデンファイナンスが騎宇麻さんに一千万貸し付けて、それを誰かが引ったくり、騎宇麻さんを自殺に見せ掛けて殺害した。裏で動いていたのは、ゴールデンファイナンスの寺島って女」
姫音子・亜々人「（思い出して、）あ!!」
小六郎「取られたモノは取り返す。そして、キチンと返す」
亜々人「えッ？」
里香子「一千万返せば、ゴールデンファイナンスとはもう何の関係もなくなるでしょ」
小六郎「そうしたら、本当の犯人が動く」
亜々人「どう云うコトですか？」
里香子「真犯人がこんな面倒くさいコトしているのは、自分から極力距離を置きたいからなの。でも、ゴールデンファイナンスに一千万返しちゃったら、自分から動くしかない」
小六郎「その時がチャンスだ」
亜々人「？」
里香子「つまり、相手が誰だか分かれば対応策も考えられるでしょ。ってコトよ」
亜々人「（感心して、）なるほど。で、どうやって、奪還するンですか？」
小六郎「銀行強盗と同じだよ」
姫音子「銀行強盗!?」
小六郎「コッチには銀行強盗の専門家が三人いる」
姫音子「三人？」

　　透子と素夫、現れて、
透子「協力させて下さい！」
素夫「ボクも！」
姫音子「（驚いて、）アナタたち」
透子「姫音子さんのおとうさんを殺した悪い奴らでしょ。許せません!!」
素夫「そうです。それに、」
姫音子「それに？」
素夫「一度、銀行強盗、やってみたかったし、」
姫音子「何云ってンの？　安定、安心、安全は？」
素夫「（都合良く、）時として冒険は必要です!!」
　　永と仁も現れて、
永「私たちも手伝います」
仁「（頷く）」
亜々人「えええええッ!!　良いの？」
仁「銀行強盗の役だと思えば、」
亜々人「そっか」
姫音子「…みんなホントに良いの？」
一同「（笑顔で頷く）」
姫音子「ありがとう…」
一同「……」
亜々人「（小六郎に、）で、具体的にどうするンですか？」
小六郎「説明しましょう。先ず、超小型の爆弾を仕掛けたドローンを用意します」
６人「ドローン!?」
　　舞台中空にドローンが現れる。
　　里香子がコントロールしている。
６人「（驚いて、）オオッ!!」
小六郎「このドローンを盾に相手を脅します」
素夫「（似非関西弁で、）オラア!!　ハヨ、カネダサント、イノチ、ノウナルデエ!!」
　　一同、吃驚して、素夫を見る。
素夫「（一同に、）いっぺんやってみたかったンです」
透子「良いンじゃない」
素夫「ありがとうございます」

亜々人「（小六郎に、）次は？」
小六郎「これだけです」
６人「（驚いて、）えええええッ!?」
仁「これだけで良いンですか？」
小六郎「誰だって命は惜しいですからね」
里香子「（フォローして、）アタマの上に爆弾があったら誰だって云うコトきくでしょ」
　　ト、ドローンをコントロールして、仁の頭上に、
仁「（驚いて、）ウワーッ!!」
　　ト、逃げ出す。
　　それを追う里香子のドローン。
　　一同、その様子を見て、
５人「（納得する）なるほどね」
透子「（小六郎に、）私たちはどうすれば？」
小六郎「（透子と素夫に、）アナタ方は事前にゴールデンファイナンスに行って、出入口の位置とその数、監視カメラの数、閉店５分前の従業員の数とお客さんの数を調べてもらえますか」
透子「閉店５分前？」
里香子「その時間が一番気が緩んでるの」
透子「（納得して、）ああ、分かりました!!」
素夫「了解です!!」
　　ト、飛び出して行く。
永「（小六郎に、）私たちは？」
小六郎「（永と仁に、）アナタ方にはマスクを用意してもらいましょうか」
永「マスク？」
里香子「正体がバレない様にね」
永「（納得して、）ああ」
仁「（里香子に、）どんなマスクでも良いンですか？」
里香子「（仁に、）アナタたちのセンスに任せるわ」
永「（同時に、）分かりました」
仁「（同時に、）お任せ下さい」
　　ト、飛び出して行く。
姫音子「私たちは？」
亜々人「……」

小六郎「歌でも唄って待ってて下さい」
亜々人「歌？」
里香子「おまじない。警察に邪魔されないようにね」
小六郎「ミュージツク!!」
音楽、カットイン。
“ペッパー警部”（作詞／阿久悠）
唄い踊る、姫音子と亜々人。
準備が出来た、透子、素夫、永、仁が順番に加わる。
歌と踊り決まったところで、小六郎と里香子現れ、
小六郎「（銃を手に、）動くなッ!!」
里香子「（ドローンのコントローラを手に、）動くとコイツ（ドローン）もろともあの世にまっしぐらだぜッ!!」
ト、二人、決まる。
場面転換、または休憩。
休憩の場合は緞帳が下ります。

■　15.
ロックキネマ劇場。時間経過。
姫音子、亜々人、小六郎、里香子、永、仁、透子、素夫。
一千万円が入ったバッグを前に万歳三唱。
一同「バンザーイ!!　バンザーイ!!　バンザーイ!!」
仁「（小六郎に、）うまく行きましたね」
小六郎「（自慢気に、）なっ!!」
里香子「（小六郎に、）こんなにうまく行くとは思いませんでしたね」
小六郎「意外に敵の罠だったりして、」
７人「まさかあ～!!」
彩里花、銃を手に現れて、
彩里花「そのまさかあ～、だよ」
一同「（驚いて、）あッ!?」
彩里花「その一千万円は追跡用の一千万」
仁「追跡用？」
彩里花「銀行じゃあね、強盗にあった時にあ

とで追跡できるように一万円札に追跡用のチップを埋め込んであるンだ」
永「（透子に、）ホント？」
透子「ホントです」
永「だったらどうして（教えてくれなかったの)?」
透子「……」
彩里花「ただのマチキンだと思って油断したンだよね」
透子「（その通りなので、）…ハイ」
仁「（痛い目に合ったのを思い出して、）あの、お金は返しますから、」
彩里花「（遮って、）お金はあげるわ」
一同「えッ!?」
彩里花「その代わり頼みがあるの」
姫音子「頼み？」
彩里花「（小六郎に、）探偵さん」
小六郎「ハイ？」
彩里花「事件の黒幕は百目鬼コンツェルンの誰かってところまでは調べがすンでるンだよね？」
小六郎「ハイ」
彩里花「だったら話は早いや」
小六郎「ハイ？」
彩里花「真犯人は、百目鬼大河。百目鬼コンツェルンの総帥さ」
一同「ええええェッ!?」
仁「（心配になって、）そんなコト云っちゃって良いンですか？」
彩里花「良いンだよ。どうせ、アンタたちには、」
仁「（遮って、大声で、）ああ、云わないでッ!!」
彩里花「（構わず）死んでもらうンだから」
仁「（嘆き、）ああ、（云っちゃった）」
　　ト、絶望。
彩里花「でも、助かる方法がひとつある」
仁「（必死に、）何です？」
彩里花「その百目鬼大河の頼みをきいて欲しい」

小六郎「百目鬼大河の頼み？」
彩里花「探して欲しいものがある」
小六郎「探して欲しいもの？」
仁「探します。何でも探します!!」
彩里花「（仁に、）良い心がけだ」
仁「で、何を探せば良いンですか？」
　　彩里花、間を置いて、
彩里花「…ヒトラーの財宝」
一同「（びっくり仰天して、）ヒトラーの財宝ッ!?」
永「（半信半疑で、）ヒトラーって、あのアドルフ・ヒトラーですか？」
彩里花「（頷いて、）そう」
一同「？」
仁「（興味津々、）そんなモノどこにあンですか？」
彩里花「だから、コノ劇場のどこかに」
一同「（またまたびっくり仰天して、）ええええッ!?」
亜々人「（気が付いて、）そうか。それで、（コノ劇場を欲しがったンだ）」
彩里花「（姫音子に、）アンタが素直に譲ってくれればこんな大騒ぎにはならなかったのに」
姫音子「それじゃあ、とうさんを殺したのも、（アンタなの?）」
彩里花「アンタのおとうさん、頑固だったからね」
亜々人「ちくしょうッ!!」
　　ト、彩里花に向かって行く。
　　が、一撃ではね返される。
一同「あッ!?」
彩里花「無駄なコトはやめなよ。私のポテンシャルは先刻承知だろ」
一同「（その通りなので何も云えない）……」
里香子「（勇気を奮い起こして、）で、ヒトラーの財宝って、具体的には何ですか？」
彩里花「金塊」
一同「（驚いて、）金塊!?」

彩里花「それも17億ライヒスマルク分の金塊」
素夫「17億ライヒスマルク？」
彩里花「日本円にして一兆円」
一同「（超びっくり仰天して、）一兆円ッ!?」
姫音子「…そんなモノがコノ劇場に!?」
里香子「（納得して、）そりゃあ、どんなコトをしても手に入れたいワケだ」
彩里花「だから、それを探して欲しいのさ」
姫音子「（疑って、）その話、ホントなンですか？」
　　彩里花、ナチスドイツの金塊を取り出して、
彩里花「サンプルだよ」
　　ト、一同の前に放り投げる。
　　里香子、拾い上げて確認して、
里香子「本物だ!!」
６人「（驚いて、）オオッ!!」
　　彩里花、古びた手帳を取り出して、
彩里花「（読み始める）昭和20年８月１日水曜日。晴。呉、海軍工廠、潜水艦ドックにて真柴少佐に新型爆弾“雷撃”の移送を命令。移送先は極秘。以降の記述は真柴少佐の報告による」
　　場面転換。

■　16
　　昭和20年８月13日月曜日。
　　ロックキネマ劇場。
　　真柴少佐、現れて、
真柴「昭和20年８月４日土曜日未明。横須賀に到着。伊 507 から大型トラックに荷物を移し、一路、東京、浅草へ。浅草ロックキネマ劇場にて我が友、叶騎宇緒くんと再会。叶くんの依頼により、地元の劇団、雷乙女隊の総勢６名の方々が協力してくれるコトになった。民間人の起用に関しては、少将の命令だった。極力、軍関係者には知られぬコト。それが、少将の意図だった。一箱50キロの新型爆弾“雷撃”の木箱を合計４千箱。彼女たちには、イヤ、私にも気の遠

くなるような数だったが、本土決戦のため、お国のため、日本の未来のためにとひと言の文句も云わず彼女たち6人は黙々と任務を遂行してくれた」

以降、真柴少佐の報告を再現する。

少女1の声「休憩です」

ト、現れる。

雷乙女隊一同「ハイ」

ト、現れる。

少女1「（雷乙女隊一同に、）歌の練習。三、ハイ」

雷乙女隊、少女1の指導の下、“すみれの花咲く頃”を唄い始める。

真柴少佐、叶騎宇緒も加わる。

歌い終わった一同、誰からともなく拍手。

尚、騎宇緒は、白の開襟シャツに黒または紺または茶色のズボン。

雷乙女隊は、上は白ブラウス、下はもんぺを基本とする。（希望）

少女1「（真柴に、）隊長さんもうまくなりましたね」

真柴「毎日毎日一緒に唄ってりゃあ、少しはうまくなるさ」

少女2「騎宇緒さんはうまくならないけど」

騎宇緒「（冗談で、）うるさい！」

一同「（笑う）」

少女3「（一同に、）この非常時にこんな大笑い出来るなんて、信じられないね」

騎宇緒「地下十メートル。誰にも聞こえやしないよ」

少女4「（騎宇緒に同意して、）そうですよね。騎宇緒さんの音痴も近所迷惑にならない」

騎宇緒「（冗談で、）コラッ!!」

一同「（再び、大笑い）」

少女5「（真柴に、）隊長さん」

真柴「うん？」

少女5「ホントに技芸鑑札もらえるンですよね？」

真柴「ああ、この任務が終わったらすぐにでももらえる」
雷乙女隊一同「やったあッ!!」
少女６「…技芸鑑札？」
少女５「（少女６に、そんなコトも知らないの、）バカ！」
真柴「今は非常時だから、どんなに優秀な役者でも、東京だったら警視総監閣下の、地方だったら、県の警察部長さんが発行する技芸鑑札がなかったら舞台に立つコトは出来ないンだよ」
少女６「鑑札なしで舞台に立ったらどうなるンですか？」
騎宇緒「（脅して、）即座に留置場に叩き込まれる」
少女６「怖！」
少女４「私は技芸鑑札もらえなくても頑張ります！　何しろお国のためですから！」
少女６「（からかって、）ヨッ！　雷乙女隊の鏡ッ!!」
一同「（笑う）」
少女４「（少女６に、）からかわないで下さい！　だってそうじゃないですか。いくら技芸鑑札もらっても本土決戦になったら、芝居なんか演ってる場合じゃないじゃないですか！」
真柴「（一同を安心させようと思って、）その時は、コノ（箱を示して、）新型爆弾でアメリカ軍なんて木っ端微塵だ!!」
雷乙女隊一同「そうだ！　そうだ！」
　　ト、盛り上がる。
少女５「（騎宇緒に、）技芸鑑札もらえたら、コノ劇場も貸してもらえるンですよね？」
騎宇緒「もちろん」
雷乙女隊一同「やったあッ!!」
少女６「（少女１に、）ロックキネマ劇場って云ったら東京一の劇場ですもんね」
少女１「（気をつかって、）日本一って云いなさいよ」
少女６「（一同に、）ロックキネマ劇場って

云ったら、日本一の劇場ですもんね!!」
雷乙女隊一同「（騎宇緒に、）ヨッ!!　日本一ッ!!」
騎宇緒「（気をよくして、）ヨシッ!!　そこまで云ってくれるなら、劇場費も奢っちゃおうッ!!」
雷乙女隊一同「やったあッ!!」
　　ト、ストップモーション。
真柴「作業が終わったのは、８月14日火曜日の未明だった。私は、約束通り、雷乙女隊のひとりひとりに技芸鑑札を手渡した」
　　ストップモーション、終わって、
騎宇緒「（雷乙女隊一同に、）この一枚の薄紙が役者にとってはなくてはならない命綱です。大事に大事にして下さい」
雷乙女隊一同「ハイッ!!」
少女１「（文面を読む）演劇技芸者之証。雷乙女隊。サトウカズコ。右ノ者ニ演劇ヲ業トスルコトヲ許ス…」
少女２「…常ニ之ヲ携帯シ臨検警察官吏ノ求メアルトキハ直ニ之ヲ提示スベシ。昭和20年８月14日。東京警視庁警視総監」
少女５「やったあ!!　コレで舞台に立てるぅ!!」
雷乙女隊一同「（大喜び）」
真柴「それでは、作業の完了と技芸鑑札の発行を祝って乾杯しましょう」
雷乙女隊一同「ハイッ!!」
真柴「今日は上官殿のご厚意により特別にジュースもチョコレートも用意してあります」
雷乙女隊一同「（大喜び）」
　　ト、各々お互いの湯呑みにジュースを注ぐ。
　　少女１、真柴のところへやって来て、湯呑みを渡す。
真柴「（湯呑みを見て、）うん？」
　　ト、何故、これかな、と思う。
少女１「（気が付いて、）底に、真柴、って」
　　真柴、湯呑みの底を確認すると確かに、真柴、と書いてある。

真柴「ホントだ。（少し疑って、）みんなのは？」
少女１「私たちのは、一緒」
真柴「？」
少女１「（？　の真柴に、）ハイ、どうぞ」
　　ト、ジュースを注ぐ。
真柴「ありがとう」
少女１「イイエ。こちらこそありがとうございました」
騎宇緒「（一同に、）行き渡りましたか？」
雷乙女隊一同「ハイ」
騎宇緒「（真柴に、）それでは、真柴少佐。ひと言、乾杯の御発声をお願いします」
雷乙女隊一同「（拍手）」
真柴「みなさんのお陰で無事に任務を遂行するコトが出来ました。この新型爆弾が日本の未来を守ってくれるコトと、技芸鑑札を受けたみなさんの舞台公演の成功を祝して、カンパーイ!!」
一同「カンパーイ!!」
　　ト、ジュースを飲み干す。
少女１「それでは、任務完了の記念に、全員で、“すみれの花咲く頃”をさびから、三、ハイ」
一同「♪すみれの花咲く頃」
　　ト、歌い始めるが、一瞬後、突然のどを押さえて、苦しみ出す。
　　二瞬、三瞬後、バタバタと倒れて行く、雷乙女隊の面々。
真柴「!?」
騎宇緒「（驚いて、少女１に駆け寄り、）どうした!?」
　　少女１はすでに死んでいる。
少女１「……」
騎宇緒「（それを確認して、）死ンでる!?」
　　真柴、少女１の湯呑みのニオイを嗅いで、
真柴「（ピンと来て、）青酸カリ!?」
騎宇緒「（真柴に、）青酸カリ!?」
　　やがて、真柴、少女１の遺体を抱きし

めて、慟哭。
騎宇緒「（言葉もない）……」
泣き続ける真柴の中に、
場面転換。
（玉音放送?）

８月15日水曜日12時55分。
百目鬼少将の私邸。書斎。
百目鬼少将。
百目鬼「（何事か考えている様子）……」
真柴、飛び込んで来て、
真柴「（激しく迫る、）どういうコトです？」
百目鬼「秘密は守らなければならない」
真柴「あの娘たちが約束を破ると云うンですか？　あの娘たちはあれが新型爆弾だと信じて疑わなかった。この国のためだと一所懸命働いてくれた。それなのに…」
百目鬼「あの金塊は日本の未来のために使わせて貰う」
真柴「国の未来は金じゃない！　人だ！　人間だ!!　その国の人間が未来を作るンだ!!」
百目鬼「（議論するのを諦めて、）理想論だな」
真柴「何ィ？」
百目鬼「国の未来は金が作るンだよ!!」
真柴「……」
百目鬼「あの金を使って私がこの国を建て直す」
真柴「（ピンと来て、）知ってたな」
百目鬼「何を？」
真柴「終戦になるコトを知ってて命令したな」
百目鬼「（図星）……」
真柴「（少女たちの悔しさ無念さを代弁する。）あの娘たちはただ舞台に立ちたかっただけなのに、夢を叶えたかっただけなのに…」
ト、百目鬼に銃（軍用拳銃）を向ける。
百目鬼「！…上官を撃てるのか？」
真柴「戦争は一時間前に終わっただろ」
百目鬼「この国の将来を潰すつもりか？」

真柴「人の心を理解出来ない人間に、この国の未来を託すワケにはいかないンだよ」
　　ト、撃つ!!
　　が、一瞬早く彩里花が現れ、真柴の銃を蹴り上げる。
　　発射された弾丸はあらぬ方向へ。
真柴「（彩里花に、）出たな、ヒトラーの秘密兵器」
彩里花「どうしてそれを？」
真柴「作戦書類の中に書いてあったよ」
　　彩里花、百目鬼を見る。
百目鬼「（その視線に気が付いて、）コイツ（真柴）も仲間になる筈だった。だから、生かしておいたンだ。それをたかが民間人を毒殺したくらいで、」
真柴「（遮って、）たかが民間人だと！　この国を守るために戦ったのは誰だ？　軍人だけか？　その軍人だって、その殆どはもともと民間人じゃなかったのか？」
百目鬼「（遮って、）貴様と議論するつもりはない。（彩里花に、）殺れ!!」
　　彩里花、真柴に向かって行く。
　　彩里花対真柴の激闘。
　　やがて、激闘の隙を見て、先の銃を手にする真柴。
　　彩里花、素早く百目鬼の盾になる。
真柴「（それを見て、）なるほど。良く訓練されてるね。さすがヒトラーの秘密兵器だ。が、その秘密兵器もヒトラーを救うことは出来なかった」
彩里花「アイツらとは性能が違う」
真柴「大きく出たねえ」
彩里花「私に弱点ははない」
真柴「たったひとつを除いてはな」
彩里花「何ィ!?」
真柴「アンタにはアンタも知らない弱点がある」
彩里花「？」
真柴「書類にそう書いてあったぜ」
彩里花「！」

真柴「アンタが暴走したときのストッパーだとさ」
彩里花「ウソだッ!!」
　　ト、再び真柴に向かって行く。
　　真柴、彩里花の額のど真ん中を撃つ!!
　　ドギューンッ!!
　　一瞬後、彩里花、機能停止して、崩れ落ちる。
真柴「（ひとり言）マニュアルは読んどくもンだな」
百目鬼「（真柴に、）貴様ァ!!」
　　次の瞬間、真柴の銃が百目鬼の額を貫く。
　　崩れ落ちる、百目鬼。
　　百目鬼、絶命。
真柴「（百目鬼の遺体に、）♪すみれの花咲く頃〜。アンタにも聴かせたかったよ。あの娘たちの歌声を聴いていたら、アンタももう少し、増しな人間になっていたかもな」
　　ト、一瞬後、自らのアタマを手にした銃で貫く。
　　真柴、絶命。
　　騎宇緒、飛び込んで来て、その様子に、
騎宇緒「（愕然、）真柴…」
　　遠くに雷乙女隊の歌声が聞こえて来る。
　　♪すみれの花咲く頃〜
　　その歌声の中に場面転換。

■　17.
　　ロックキネマ劇場。現在。
　　一同、それぞれの思いの中に居る。
一同「……」
亜々人「真柴少佐、可哀相…」
永「雷乙女隊の娘たちも、」
仁「ただお芝居がしたかっただけなのに」
透子「（姫音子に、しみじみト、）私たちって幸せですね」
姫音子「（頷いて、）うん」
素雄「（姫音子に、）何でも好きなコトが自由に出来るって、幸せなコトなンですね」

姫音子「（頷いて、）うん」
里香子「（気が付いて、彩里花に、）あれ？　え？　じゃあ、何で、アンタ、生きてンの？」
彩里花「（自慢気に、）自動再生装置ってのが付いててね」
里香子「自動再生装置？」
彩里花「自動で再生したってワケ」
小六郎「さすが、ナチス・ドイツの科学力だな」
里香子「先生、（感心してる場合じゃないでしょ）」
姫音子「（彩里花に、）ちょっとおかしくないですか？」
彩里花「何が？」
姫音子「関係者がみんな死んじゃったのに、今の話、誰が記録したンです」
彩里花「叶騎宇緒。アンタのおじいさん」
姫音子「（気が付いて、）あ！」
彩里花「（手帳を示して、）この記録は、百目鬼巳喜男、真柴正人、そして、アンタのおじいさん、叶騎宇緒、三人の記録を調べてまとめあげたもンなんだ」
透子「姫音子さん、何も知らなかったンですか？」
姫音子「（頷いて、）うん」
亜々人「オヤジさんから何も？」
姫音子「（頷いて、）うん」
亜々人「おじいさん、オヤジさんに何も伝えなかったのかしら？」
姫音子「（推理して、）きっと封印したかったンじゃない」
永「彼女たちを静かに寝かせといてあげたかったンですよ」
仁「一兆円の金塊が隠してあるなんて分かったら、大騒ぎですもんね」
　　８人、思い出した様に、
８人「あ、一兆円ッ!?」
彩里花「(8人に、）やっと思い出してくれたね。（本題を）」

姫音子「（彩里花に、）でも、何で今になって？」
彩里花「偶然見付けちゃったのよ」
仁「誰が？」
彩里花「SOL が」
一同「ソル!?」
彩里花「Satellite in Orbital Laser weapon. 略して SOL 」
素雄「何です、それ？」
彩里花「百目鬼グループが開発した、対地レーザー衛星」
一同「対地レーザー衛星!?」
彩里花「通常はインド洋上の静止軌道に位置してるんだけど、指令によって目的上空に移動、発射態勢をとる。武装は、レーザー砲とビーム砲。ビーム砲で雲などの障害物を取り除き、レーザー砲で攻撃する。今は人間サイズの目標まで命中させるコトが出来るのよ」
一同「!?」
仁「何でそンなモン？」
彩里花「北朝鮮のミサイルをいつでも破壊できる様にね。自分の身は自分で守らないと。この国の政治家なんて当てにならないからね。で、その SOL が試験飛行中に偶然この劇場の地下に眠る金塊をキャッチしちゃったのね。総額、一兆円の金塊をね。最初は半信半疑だった総帥も、 SOL の情報だったら確実だって、本気出しちゃったワケ。何しろ一兆円だからね。誰だって欲しいでしょ。一兆円」
仁「（素直に、）ハイ」
永「（咎めて、）仁」
仁「あ、ごめんなさい」
彩里花「だから、探してよ、一兆円」
仁「（思わず、）ハイ」
永「（怒って、）仁ッ!!」
仁「（しょんぼり）……」
彩里花「（構わず、）それで、アンタたち全員の命が助かるンだ。安いもンでしょ」

里香子「人の命はお金には代えられないわ」
彩里花「（鋭く、）そんなコトはどうでもいいッ!!」
一同「（静まる）……」
　　彩里花、手帳を一同に示して、
彩里花「ヒントはこの中にある、と思う」
　　ト、手帳を一同の前に置いて、
彩里花「期限は１時間」
一同「１時間!?」
彩里花「（構わず、）金塊がある場所が分かればいい。あとは、百目鬼コンツェルンが何とでもするから」
　　ト、天井に何か投げ付ける。
　　ビュッ!!
　　その何かは天井にピタッと張り付く。
　　ピタッ!!
一同「？」
彩里花「監視カメラ。おかしなマネしたら、すぐ分かるからね。その時は、人質の命はその瞬間に、Das Ende.終わりだからね」
素雄「（彩里花に、）人質って？」
彩里花「（素雄に、）ハイ。君に決定ッ!!」
　　ト、素雄に銃を向ける。
素雄「（情けなく、）そんなあ…」
彩里花「（一同に、）それじゃあ、１時間後に、」
　　ト、素雄を連れて退場。
透子「（心配して、）素雄くん…」
里香子「（小六郎に、）先生、（どうします?）」
小六郎「時間がない。やるだけやってみよう」
透子「（小六郎に、）警察は？」
里香子「（フォローして、）誰がグルだか分からないし、コトの顛末を説明してるだけで１時間なんてあっという間に過ぎちゃうわ」
永「自分たちでやるしかないか」
姫音子「（決心して、）やってみよう！」
亜々人「（ちょっと驚いて、）お嬢さん!?」
姫音子「そんなモンがホントにあるかどうか

分かんないけど、やってみよう」
透子「（一同に、）やりましょ。みんなで素雄くんを助けましょッ!!」
一同「（一致団結して、）おおッ!!」
　　里香子、早速、手帳を速読で読んで、
里香子「（小六郎に、）ヒントらしいヒントはありませんね。気になるコトと云えば、地下10メートル。それと、騎宇緒さんが昔、仕掛師だったってコトくらいですかね」
透子「仕掛師？」
里香子「映画や舞台の仕掛を考案したり、作ったりする人のコト。例えば、ホラ、釣天井とか、戸板返しとか」
透子「（頷いて、）なるほど」
仁「（里香子に、）読むの速くありません？」
里香子「（仁に、）速読六段だからね」
仁「速読六段？」
小六郎「（姫音子に、）この劇場に地下室は？」
亜々人「（が、答える）あるにはありますが、ただの物置ですよ」
小六郎「物置でも何でもとにかく行ってみましょう！」
６人「（その勢いに、思わず、）ハイッ!!」
　　場面転換。
■　18
　　地下室。
　　一同、来て、
小六郎「（室内を確認して、）ホントに物置ですね」
　　亜々人が説明する。
亜々人「今までの公演で使った大道具や小道具の残骸です」
小六郎「（考えて、）どっかに入口がある筈だ。探して」
６人「入口!?」
仁「（小六郎に、）何の入口です？」
小六郎「もっと下へ行くための入口だよ」
仁「もっと下？」
里香子「手帳にあった数字は地下10メートル。

ココはせいぜい５メートルでしょ」
仁「なるほど」
　　姫音子、何か見付けて、
姫音子「あ！」
６人「何!?」
姫音子「(6人に、）からくり箱」
６人「からくり箱!?」
姫音子「みんなで箱根へ行った時のお土産」
小六郎「（姫音子に、）みんなって、騎宇緒さんも行った？」
姫音子「ええ、おじいちゃんが買ったンです、コレ」
小六郎「（ピンと来て、姫音子に、）開けて」
姫音子「え？」
小六郎「そのからくり箱、開けて」
姫音子「どうやって開けるンだったけなあ…」
　　ト、いろいろ試してみる。
　　が、なかなか開かない。
　　見兼ねた透子が、
透子「（姫音子に、）貸して下さい」
　　ト、からくり箱を借り受けて、
透子「こうでしょ。こうでしょ。こうでしょ。ハイ」
　　ト、あっという間に開けてしまう。
６人「（感心して、）おおッ!!」
透子「(6人に、）静岡出身ですから」
　　ト、ワケの分からない自慢。
６人「？」
里香子「（透子に、）貸して」
　　ト、からくり箱を借り受けて、中を見る。
里香子「（小六郎に、）先生ありました」
　　ト、箱の中から古びた紙片を取り出して、小六郎に見せる。
小六郎「何か書いてある？」
里香子「（紙片を広げて読む）
“Here’s looking at you,kid ”」
一同「？」
小六郎 「“君の瞳に乾杯”!!」
里香子 「“カサブランカ”!!」

姫音子「おじいさんの好きだった映画だ！」
小六郎「カサブランカ、カサブランカ、カサブランカ…」
　　ト、歩き回っている。
　　仁、下手の壁に数字の落書きを見付けて、
仁「あれ？　こんな所に３て書いてある」
小六郎「3?」
永「あ、ココにも」
　　ト、上手の壁に数字の落書きを見付けて、
永「こっちは８」
小六郎「8?」
　　亜々人、センターの壁に数字の落書きを見付けて、
亜々人「ココにもありました。こっちは５です」
小六郎「5?」
　　姫音子、下手の壁に数字の落書きを見付けて、
姫音子「（小六郎に、）あ、１も２もあります」
亜々人「４と６もありました」
永「７と９も」
小六郎「１から９までの数字の落書き…」
一同「？」
小六郎「（ピンと来て、里香子に、）カサブランカの公開日は？」
里香子「アメリカでは1942年11月26日。日本だと1946年６月20日」
小六郎「日本だな」
里香子「（も、ピンと来て、）ハイ」
小六郎「(6人に、）今から私の云う順番にその数字のところを押してみて下さい」
６人「（何やら、期待して、）ハイッ!!」
小六郎「１」
姫音子「ハイ」
　　ト、１と描いてある数字のところを押す。
　　すると、その部分が少し凹む。

姫音子「あ!?」
小六郎「どうしました？」
姫音子「数字が描いてあるところが少し凹みました」
里香子「（推理、）壁の数字がパズルになってるンだ！」
小六郎「次は、９」
永「ハイ」
　　ト、９を押す。９が凹む。
小六郎「次、４」
亜々人「ハイ」
　　ト、４を押す。４が凹む。
　　以下、同じように、662と続ける。
小六郎「最後は０だ」
６人「0?」
姫音子「０はありません」
亜々人「こっも」
永「こっちにも」
小六郎「どういうことでしょう？」
里香子「あ！」
小六郎「（里香子に、）どうしました？」
里香子「（小六郎に、）先生の足元」
小六郎「え？」
　　ト、足元を見ると、その床に、０の文字。
小六郎「あ！」
里香子「灯台もと暗しって奴ですね」
小六郎「そういうコトですね」
　　ト、足元の０の数字を踏み付ける。
　　一瞬後、部屋全体が動き出す。
　　ゴゴゴゴゴ〜。
一同「（驚いて）オオオオオッ!?」
仁「部屋が下がってる!?」
里香子「部屋全体がエレベーターになってるのよ」
６人「エレベーター!?」
　　やがて、エレベーターが地下に到着する。
　　緊張を隠しきれない一同。
　　場面転換。

■　19

一同の目の前に、巨大な鉄の扉。その真ん中に、“雷”の文字が〇で囲まれている。

一同「？」

里香子「（小六郎に、）何でしょう？」

仁「巨大な扉でしょ」

里香子「じゃなくて、」

ト、“雷”の文字を示して、

里香子「コレ」

仁「雷、でしょ」

里香子「（焦れて、）じゃなくて、意味だよ。意味！」

仁「雷の意味？」

里香子「（遮って、）アンタはちょっと黙ってて！」

仁「（不承不承、）ハイ…」

透子「扉を開けると雷が落ちる的な？」

永「あ、雷乙女隊の怨念か何かで、」

姫音子「（気が付いて、）リスペクト!!」

里香子「リスペクト？」

姫音子「一所懸命頑張った雷乙女隊に対するおじいちゃんのリスペクトの記し」

小六郎「それだ」

里香子「じゃあ、開けても、」

小六郎「大丈夫だろ」

里香子「（仁に、）仁くん、開けて」

仁「（驚いて、）えー!?　ボクですか？」

里香子「じゃあ、永さんも」

永「（平然と、）ハイ」

引き戸式の扉。

永（上手）、仁（下手）、取っ手に手を掛けて、

永・仁「(5人に、）開けます!!」

５人「（頷く）」

永・仁「せーの」

ト、扉を上下にゆっくりと開ける。

少しずつ、中の様子が現れる。

手前の台の上に集合写真。（真柴少佐

と雷乙女隊が写っている。一同笑顔）
その前に、位牌が七つ。（真柴少佐と雷乙女隊のモノ）
その奥に木箱を覆った巨大な白い布が見える。
扉が開ききったところで、一同、位牌に近寄る。

里香子「（その中の一つを手に取り、小六郎に、）位牌です。俗名、真柴正人。行年、三十三歳。昭和二十年八月十五日」
小六郎「（頷いて、）うん」
姫音子「（も、一つ手に取り、読む）俗名、サトウカズコ。行年、十六歳。昭和二十年八月十四日」
亜々人「雷乙女隊の人ですね」
姫音子「（頷いて、）うん…」
亜々人「おじいさんが祀ったンですね、きっと、」
姫音子「（頷く、）うん…」
透子「毎日お参りしてたんでしょうね」
姫音子「（頷く、）うん…」
亜々人「（姫音子に、）おじいさん、やさしい人だったンですね」
姫音子「（大きく頷いて、）うん…」
永「（感極まって、泣きながら、）可哀相!!」
ト、並んだ位牌に手を合わせる。
６人、それに倣う。
一同「……」
やがて、小六郎が、６人に、
小六郎「さて、この布の下に何があるかだ」
６人「（興味津々）……」
仁「（興奮して、小六郎に、）ありますかね、金塊!?」
小六郎「（一同に、）開けてみるか」
６人「（期待して、）ハイ」
小六郎「（仁に、）そっちの端持って」
仁「ハイ。（ト、指示された布の端を持つ）」
小六郎「（仁に、）行くぞ！」
仁「ハイ」
小六郎「せーの」

ト、小六郎と仁、布を捲り上げる。
中から、“雷撃”と記された木箱が大量に現れる。
一同「（驚いて、）オオオオオッ!!」
その数、実に、 4,000 箱。
（その根拠。重さ10キロの金塊の大きさは、 200 ミリ× 100 ミリ×30ミリ。
コレで、金額にして５千万円。
一箱に５本で重さ50キロ、金額にして、２億５千万。
一兆円を２億５千万で割ると、４千箱。
女の子二人で50キロの木箱だったら、運べると想定しました。
が、舞台に４千箱は無理なので、まあ、４千箱もあるト云うイメージを持っていただければ、ト思いまして、）
亜々人「（姫音子に、）“雷撃”って何でしょう？」
姫音子「新型爆弾の名前じゃない」
亜々人「そうか。彼女たちは新型爆弾だと思って運んでたンですもンね」
里香子「（小六郎に、）開けてみますか？」
小六郎「（頷いて、）うん」
里香子「開けます」
ト、何やら七つ道具のようなモノを出して、木箱の蓋を開ける。やがて、
里香子「（小六郎に、）開きました」
小六郎「中を確認して、」
里香子「（中を確認して、）ありました！金塊です！」
ト、中の一つを手にして、６人に示す。
６人「（それを見て、）オオオオオッ!!」
仁「あったあッ!!」
永「あった、あった、あったあッ!!」
亜々人「（姫音子に、）ありましたね!!」
彩里花「（一同に、）ご苦労様」
ト、素雄の背中に銃を突き付けながら、彩里花が現れる。
彩里花「（腕時計を確認して、）丁度一時間。やれば出来るじゃない」

透子「（彩里花に、）約束通り、素雄くんは
返してくれるンでしょうね」
彩里花「約束？　そんな約束したかしら？」
ト、素雄を一同のところへ押しやり、
全員を手にした銃の射程内に捉える。
仁「（思わず、）悪党ッ!!」
彩里花「（ニヤリ、）ありがとう。お礼にア
ンタから死んで貰うね」
ト、仁にその銃口を向ける。
仁「あらッ!?」
ト、その時、急激に扉が閉まる！
ドーンッ!!
彩里花「（同時に、）えッ!?」
８人「（同時に、吃驚して、）何ッ!?」
一瞬後、室内が急激に暗くなる。
一同の悲鳴が交錯する。
さらに一瞬後、室内の一カ所がボーッ
と薄明るくなる。
永「（それを発見して、仁に、）何、何？」
仁「（怯えながら、）何でしょう？」
やがて、薄明かりの中に、ヒトラーの
亡霊が姿を現す。
彩里花「（その姿を認めて、）総統…？」
ヒトラーの亡霊「（彩里花を認めて、）我が
親愛なる彩里花、久しぶりであった」
彩里花「ハイル・ヒトラーッ!!」
ト、ヒトラーの亡霊にナチス式敬礼。
８人「（半信半疑で、）ハイル・ヒトラー??」
里香子「…ヒトラーの亡霊？」
ヒトラーの亡霊「（構わず、）全世界を再び
この手中に収めるために、私は、自らココ
に蘇った。世界は再び私の前にひれ伏し、
私の下部となるのだ。そのためにこの国に、
私の大切な財宝を預けたのだ。彩里花!!」
彩里花「ハッ!!」
ヒトラーの亡霊「オマエの力を貸して欲しい」
彩里花「（緊張して、）何なりと」
ヒトラーの亡霊「実体化するためにオマエの
身体エネルギーを貸して欲しいのだ」
彩里花「ハッ？」

ヒトラーの亡霊、構わず、彩里花から
そのエネルギーを奪い取る。
気を失う、彩里花。
彩里花「……」
８人「（それを見て、吃驚、）あッ!?」
ヒトラーの亡霊が実体化し始める。
里香子「（小六郎に、）ヒトラーの亡霊が実体化してます」
小六郎「（頷いて、）うん」
ヒトラーの亡霊、８人に向き直って、
ヒトラーの亡霊「(8人に、）同志諸君!!
君たちの身体エネルギーも私に捧げてくれたまえ!!」
仁「（怖々、）同志じゃねえし、」
永「（も、怖々、）エネルギーも捧げられないし、」
８人「（怖い）……」
ヒトラーの亡霊、左右の腕を大きく振り上げて迫って来る。
里香子「(7人に、）みんな、下がってッ!!」
７人「（その勢いに、）ハイッ!!」
ト、里香子の後ろに回り込む。
里香子「（小六郎に、）先生！　支えて！」
小六郎「おうッ!!」
ト、里香子の後ろに回って背中を支える。
里香子、両手を組んで、経を唱え出す。
里香子「東方に降三世夜叉明王、南方に軍荼利夜叉明王、西方に、大威徳夜叉明王、北方に、金剛夜叉明王、中央に、大日大聖不動明王……」
（とうぼうにこうさんぜやしゃみょうおう、なんぼうにぐんだりやしゃみょうおう、さいほうにだいいとくやしゃみょうおう、ほっぽうにこんごうやしゃみょうおう、ちゅうおうにだいにちだいしょうふどうみょうおう…）
姫音子「（小六郎に、）何、やってるンです？」
小六郎「悪霊退散!!」

姫音子「相手はドイツ人ですよ。効くンですか？」
小六郎「分からんッ!!」
姫音子「…？」
　　構わず迫って来る、ヒトラーの亡霊。
　　里香子、さらに力を込めて、
里香子「見我身者発菩提心、門我名者断悪修禅!!」
（けんがしんしゃほつぼだいしん、もんがみょうしゃだんなくしゅぜん !!）
　　ヒトラーの亡霊の気と里香子の気が中空で激突する。
　　フォース対フォースのイメージ。
　　空気がスパークッする。
　　中空で火花が飛び散る。
　　里香子、ヒトラーの亡霊の気に後ろに押し倒されそうになる。
里香子「（小六郎に、）先生ッ!!」
小六郎「おうッ!!」
　　ト、さらに力を入れて支える。
　　部屋の中に風が吹き始める。
里香子「ナマクサーマンダーバーザラインセンダー……」
　　風がさらに強くなる。
　　その強風に耐えられなくなった、姫音子、亜々人、永、透子が次々に吹っ飛んで壁に叩き付けられる。
里香子「（さらに語気を強めて、）マーカロシヤナーソワタヤウンタラタカンマン…」
小六郎「（仁、素雄に、）押さえろ!!」
仁・素雄「ハイッ!!」
　　ト、里香子を支える。
里香子「聴我説者得大知恵!!」
（ちょうがせつしゃとくだいちえ!）
　　ヒトラーの亡霊、さらに迫って来る。
ヒトラーの亡霊「Sterben!!　（死ね）」
　　小六郎、里香子、仁、素雄、吹っ飛ぶ。
　　ヒトラーの亡霊が鬼気迫る表情で迫って来る。
４人「ウワワワワワッ!!」

その時、雷乙女隊が現れて、ヒトラーの亡霊の動きを止める。
ヒトラーの亡霊「Was?　（何）」
仁「雷乙女隊だッ!?」
雷乙女隊「（里香子に、）今よ!!」
里香子「ハイ。知我心者即身成仏!!」
（ちがしんじゃそくしんじょうぶつ!!）
雷乙女隊「（ヒトラーの亡霊に、）アナタの時代はとっくの昔に終わったわ」
ヒトラーの亡霊「Laut!　（うるさい）」
ト、雷乙女隊を振り払い、
ヒトラーの亡霊「（一同に、）時代は少しも変わっていないではないか。闘いがある限り、私はいつでも蘇る!!　Sterben!!」
ト、激しく気を送る。
里香子、雷乙女隊、それを受けて、跳ね返す。
その気がヒトラーの亡霊に影響を与える。
雷乙女隊「（里香子に、）今よ!!」
里香子「ハイ。知我心者即身成仏!!」
（ちがしんじゃそくしんじょうぶつ!!）
ヒトラーの亡霊、苦しみ出す。
小六郎「もう少しだ!!　頑張れ!!」
仁・素雄「頑張れ!!」
里香子「ナマクサーマンダーバーザライン!!」
ヒトラーの亡霊、その形がゆがみ始める。
ヒトラーの亡霊「グワワワワワッ!!」
里香子「（さらに語気を強めて、）ナウマクサマンダバザラダンカン!!」
ヒトラーの亡霊、恐ろしい悪霊の形相になる。
小六郎・仁・素雄「ウワワワワワッ!!」
最後の力を振り絞って、ヒトラーの亡霊が迫って来る。
里香子、小六郎、仁、素雄、必死!!
里香子「ナマクサマンダバザラダンカン!!」
ヒトラーの亡霊「ギエエエエエッ!!」
里香子「（最後の力を振り絞って絶叫、）イ

ヤアアアアアッ!!」
　　ヒトラーの亡霊、断末魔の声を上げながら木っ端微塵に砕け散る。
　　ドカーンッ!!
　　やがて、静けさが戻って来て、
里香子「（ポツリと、）…終わった」
小六郎「（里香子に、）やったな」
里香子「（頷いて、）ハイ」
小六郎「(7人に、）みんな終わったぞ!!」
　　それぞれのリアクション。
彩里花「まだ終わってないわ」
　　ト、ゆっくり立ち上がり、腕時計のスイッチを押してから、
彩里花「よくも総統を…」
仁「（驚いて、）生きてる!?」
姫音子「（彩里花に、）今時、世界征服も独裁者も流行らないでしょ。憧れの21世紀よ」
彩里花「（構わず、）この世界に平和な時など訪れるモノか。もちろん、オマエたちにもな」
小六郎「何？」
彩里花「今、SOLのスイッチを入れた。（腕時計のカウントダウンを確認して、）後、60秒で全員、地獄へ道連れだ」
　　８人、驚愕して、「えッ!?」「何!?」等々。
彩里花「レーザービームの一万度の炎で共に焼かれよう!!」
８人「（さらに驚いて、）えええええッ!?」
　　ト、彩里花、カウントダウンを始める。
彩里花「あと50秒…」
里香子「（小六郎に、）先生…」
小六郎「（頷いて、彩里花に、）ってコトはSOLはこの真上だな」
　　ト、指で示す。
彩里花「お察しの通り。この真上、高度１万メートル上空さ。その誤差10ミリ。だから、絶対、外さない」
里香子「先生…」
小六郎「（頷いて、）うん。プラン、」

小六郎・里香子 「“私を月に連れて行って”ッ!!」
音楽、カットイン。
“フライ・ミー・トゥ・ザ・ムーン”
（ロッド・スチュワート）
小六郎、里香子、６人に向き直って、
小六郎「ありがとう。みんな」
里香子「楽しかったわ」
６人「？」
彩里花「（小六郎と里香子に、）最後のお別れ？」
里香子「（遮って、）アンタともね」
ト、彩里花の額に強烈なパンチ。
彩里花、気を失う。
里香子「改良しておけばよかったのに」
小六郎「（姫音子に、）あとは、よろしく」
姫音子「よろしくって…？」
里香子「先生。あと20秒」
小六郎「（頷いて、）うん。行こう!!」
小六郎・里香子「トウッ!!」
ト、ジャンプ。
天井を突き破り、やがて、大空へ。
６人、大空を行く二人を見詰めて、
６人「（呆然と、）飛んだ…」
場面転換。

■　20
大空。
物凄い速度で SOL に向かう、小六郎と里香子。
その中にゆっくりと暗転。

■　21
暗転の中に大爆発。
やがて、静けさが戻って来る。
照明が戻って来ると、その中に姫音子。
姫音子がコトの顛末を語る。
姫音子「SOL から発射されたレーザービームは百目鬼コンツェルンの本社ビルを破壊した。最上階の会長室に居た百目鬼大河は自

らの牙城と共に崩れ去った。小六郎さんと里香子さんはその後、行方不明。と、云うより、あの二人はもともと映画の登場人物で此の世には存在しないはずの人たちだった。その二人の最後の作品は、“ロック探偵事務所シリーズ第17作、私を月に連れて行って”と云うタイトルで、日本の危機を救うために東京に向けて発射されたICBMにジェットパックを背にした二人が突っ込んで行く。と云う物語だった。念のために小六郎と里香子を演じていた二人の俳優、長谷川官九郎さんと加賀ルリ子さんのコトも調べてみたが、二人は作品の打ち上げで行った温泉旅行の帰りに交通事故に遭って亡くなっていた。因みにかあさんがなくなった時に運んでいたフィルムがこの作品だった。私はとうさんの大好きだった、何しろ 500 回は観たらしい、映画の登場人物が、映画から飛び出して、とうさんの代りに私を助けに来てくれたのだ。と、信じることにした。世にも奇妙な物語である。さて、劇場の地下から発見された一兆円の金塊は、拾得物と云うコトで、私の、イヤ、私たちのモノになった。超絶ラッキーである。その多くは世界中の恵まれない子供たちのために寄付してしまった。太っ腹でしょ。残りのちょっとだけ貰って、ホントにちょっとだけ貰って、劇場を新築した。そう。とうさんとかあさんの意志を継いで私も劇場主になった。今日そんな私の初めてのプロデュース作品、劇団、“誰もいない国”の公演初日だ。公演タイトルは“浅草★ロ・ロ・ロック”仁くんがホンを書いて、永さんが演出をした。私も亜々人ちゃんも透子ちゃんも素雄くんもちょっとだけ出してもらった。そんなワケで最後の最後まで
存分に楽しんで下さいね。では、
It’Show Time!」

音楽、カットイン。

“ Credits ”ラ・ラ・ランドより。

出演者一同のタップダンス。
やがて、盛り上がるタップダンスの中
にゆっくりと幕。

おしまい

決定稿脱稿2017年10月27日金曜日。
修正日2021年 1 月10日日曜日。

作者連絡先kiyo-u@kb3.so-net.ne.jp